再訂

女子國語讀本

巻七

4b
810
明42

42212
教科書文庫
4
810
42-1907
20000
65470

資料室

明治四十年十二月五日
文部省檢定濟

4b
810
明42

吉田彌平　篠田利英
小島政吉　岡田正美　共編

再訂女子國語讀本　卷七

東京　金港堂書籍株式會社

広島大学
教
65470
図書

再訂女子國語讀本卷七目次

一　ウォシントンの母を憶ふ……一
二　氷のきらめき……幸田露伴……八
三　友なる寫眞師に（書翰文）……尾崎紅葉……一一
四　進學ノ喩（原漢文）※……柴野栗山……一八
五　高名の木のぼり……兼好法師……二一
六　松下禪尼……兼好法師……二二
七　地球の未來……理學博士　横山又次郎……二四
八　吾が故郷……志賀矧川……三一

九　埴生の宿（新體詩）……（中等唱歌集）……三五
一〇　仁和寺の法師……兼好法師……三六
一一　先妣西谷氏碑陰ノ記（原漢文）……山田方谷……四〇
一二　漢詩二首（漢文對照）……四五
一三　俳句の感興※……（雨窓閑話）……四七
一四　俳句春秋（俳句）……五二
一五　笠置の御沒落……（太平記）……五三
一六　最後の參内……（太平記）……六二
一七　ヒマラヤ紀行その一……六八
一八　ヒマラヤ紀行その二……七四
一九　狐塚（狂言）……（狂言記）……八一

二〇　熊王の發心……隱士松翁……九一
二一　道德と法律　その一……法學博士梅謙次郎……九八
二二　道德と法律　その二……法學博士梅謙次郎……一〇四
二三　人臣の道……源親房……一一一
二四　吉野の霧……源親房……一一六
二五　百花譜……大町桂月……一二三
二六　華山人ガ百花畫卷ニ題ス（漢文對照）……林鶴梁……一二八
二七　古より今はまされり※……本居宣長……一三一
二八　洋學開祖諸哲の苦學……文學博士大槻文彦……一三三
二九　自警七則（漢文對照）……佐久間象山……一四五
三〇　妹にさとす（書翰文）※……吉田松陰……一四九

再訂 女子國語讀本卷七目次 終

年光歲華
閑栖閑居幽棲

再訂 女子國語讀本卷七

一　ウォシントンの母を憶ふ

十八世紀の年光將に盡きなんとせるとき、北米合衆國の建設者たるジョージ、ウォシントンは、マウント、ベルノンの閑栖に於いて、靜かにこの世を辭し去りしが、未だ一年ならざるに、この偉人の母も八十七の高齢を以って、簡素にして幸福なりし生涯を終へて、安らかに永遠の眠に就きぬ。千八百三十三年五月七日、この偉人の母のために建設すべき記念碑の定礎式、壯嚴に且つ、盛大に擧行せら

一端一斑

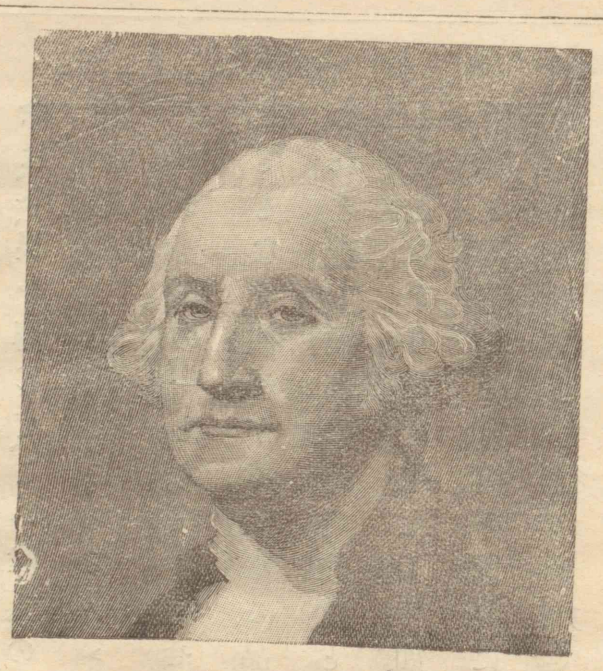
品格品性

れたり。當日、大統領アンドリユー、ジャクソンのなした る演說は頗る會衆を感動せしめたるものの如し。今、左に、その一端を錄せん。

今、ウォシントン老夫人の主義と行狀とを追憶せんとすれば、勢、ウォシントンその人を想ひ起こさざるを得ず。實に、この母とこの子との運命は相纏綿して、分離すべからざる・ものあるなり。

ウォシントンが品格の偉大なるは、諸君のまのあたり見られし所なり。その市民として・武人として・乃至、文人として・の生活は、また、諸君の熟知せらるゝ所なり。若し人類にかゝる評語を下すを得べくば、彼れは實に

誤謬なき判斷を有せる人なり。その目的や誠實、その主義や高潔。自重の心・自信の念、極めて篤し。その事に當たるや、細檢精査、その兩端を叩き、原委を窮め・ずんば、容易に判斷を下すことなし。而して、その意一たび決するや、斷じてこれを行ひ、苟も踟躕することなし。千艱・萬危、



ウォシントン

祝ること坦途の如し。わがウォシントンは、實に、かく

言ふまでもなく勿論

の如き人なりき。

余は、今、眼を轉じて、この偉人の母を見ん、この偉人の家庭を見ん。吾人は、こゝにかゝる偉大なる品格を助成すべき要素の、一として具備せざるなき・を見る。言ふまでもなく、彼れが偉大なる品格は天賦なり、生得なり。されど、若し、彼れに、母の注意と判斷との、これを指導する・ことなかりせ・ば、果たして、如何に。いかんぞ道德と愛國と智慧との實例を世界に示して、一世を鼓舞し、後代を警醒する・こと彼れが如くなるを得んや。或は、天下民人の利害を擧げて、自家の功名心を滿足する資に供せし・かも、また、未だ知るべからず。何となれば、これ

節制克己

結果にあらずや

結果にあらざるを知らんや

節制なき偉人の、動もすれば陷り易き・病患なればなり。」

嗚呼、この偉人の少時を回想し、その母の感化が全く偉人の運命を左右したることを追想する・は、我が國の女性に取りて、いかに必要なることぞや。苟も、かの母の主義にして健全ならず、その愛情にして平正ならざり・せば、その子の將來未だ知るべからず、從つて、我が國家の運命も、亦、未だ知るべからざり・しなり。而して、吾人が、今日、我が國の女性の智德に關して、聊か他に誇るべき長所ある・を見るもの、是れ、豈に、この賢母と偉人とが相竝んで、吾人の前に赫々たる光輝を放てる・結果にあらずや。思ふに、世の母たるものの、此の世に於いて、最

も滿足を感ずる・は、その子女の、德器を成就せる・を見るにあり、その子女の、社會に活動して、事を成し、名を揚ぐる・を見るにあり、而して、その子女によりて、己れも亦世人に嘆美せらるゝにあり。ウォシントン老夫人の如きは、實に、此の上なき滿足を以つて、その生涯を終へられたるもの・と謂ふべし。

かくて、記念碑は成れり。その銘に曰はく、「ウォシントンの母メーリー」。と。何ぞ、其の語の甚だ簡約にして、意味の極めて深長なる・や。思ふに、過去七十年の間、幾多の女性に向かつて、無言の雄辯を揮ひし・ものは、この記念碑なり。而して、未來永劫に亙りて、不斷の教訓を垂れん・ものも、亦、この記念碑なるべし。（歐米名士の家庭に據る）

○演習

(一) 左の語の意義の異同を說明せよ。

活動　少時　簡約　自重

運動　幼時　簡單　自信

(二) 左の口語を文章語に改めよ。但し、疑問の形にして語勢を强くせよ。

母の育て方がよくなかったならば、その子の將來はどうなるか、わからない。

(三) 「是れ豈に」と云ふ句を用ひて、短文を綴れ。

(四) 左の文を平敍文に改めて、兩者の語勢の何れが强きかを考へよ。

何ぞ、其の語の簡約にして、その意味の極めて深遠なる・や。

(五) 左の句の類句を作れ。

その目的や誠實、その主義や高潔。

二　氷のきらめき

幸田露伴

我れに用あるものを人に與へんことは難かるべけれど、我れに用なくして、人に益あらん・ものは、ただ速かに贈り與へん・こそ、よろしかるべけれ。白紙を多く蓄へ持てば、紙の蠹、いつの間にか、これを蝕ひ、フラネルを多く蓄へ有てば、フラネルの蟲、何時か、これを食ふ。有より無にゆくは物の定まりたる習なれば、たとひ、石の唐櫃に藏めかくして、鐵の海老錠をさし固めたれ・ば、とて、月日流れ移らば、桃は終に必ず其の甘き液を失ひ、橙は終に必ず其の芳しき香を失ふ・べし。もし、また、智を竭くし、勞を敢へてし・て、或は能く物を保ち得とも、物遺りて、人亡びな・ば、何の甲斐

何の甲斐かあるべき

何の益かあるべき　何の必要かあるべき

かあるべき。ただ、味甘く、香芳しき・中に、人に與へん・には若かじ。むかし、富者元載といへるは、身死して、家に胡椒八百石を殘したりき、といふ。如何に多くの客を日々に饗應せば、とて、八百石の胡椒をば、抑何にせん。財に富みて、德に貧しき・人の爲すことは、都て、此れに近きが多し。憫みつべし。

秘めに秘む　隱しに隱す

或る人、外國より歸りし友に、いと美しき玻璃の瓶子を貰ひけるが、物吝しみする癖甚だしき男なりければ、これを碎き破らんことを恐れて、彌生の節句の白酒盛る料に、など、妻の云ふをも用ひずして、ただ、箱の中に祕めに祕め置きけり。然るに、或る時、ふと其の箱を開き見しに、何時・如

何なる折・の物の響にか壞れけん、悲しくも、三つ四つに碎け居けれ・ば、妻を責め、婢を罵り・て、「おのれらこそ斯くはしたらめ。」と、雷の落ちかゝるが如く怒り、わめき、やがては、全く知らぬ由を訴へて啜り泣きする・妻・婢・と共に、己れも只管啜り泣きしつゝ、氷きらめく・目の前の・缺片を見ては、恨み歎きけり。　瓶子は酒なり水なりを盛りてこそ甲斐もあれ、用ふることも無く、箱にのみ藏め置かん・には、何の甲斐あらん。　傍眼より其の男の上をおもひ見るに、一度も其の瓶子を用ひたるならねば、瓶子忽ち來たり、瓶子忽ち去っ・て、ただ、是れ、瓶子を夢に見たるに等しかるべき・を、泣きに泣きたる・其の・涙のみの眞なるこそ、世にも拙く、愚しき・わざに思ひなさるれ。　かへすがへすも、我が用ひぬものは、人に與へん・には若かじ。　相悅びて笑まざらんまでも、相恨みて泣かざらん・かた賢かるべし。（潮待ち草）

○演　習

（一）　本文の中なる「こそ」の係結を悉く指摘せよ。
（二）　「何時如何なる折の物の響にか壞れけん」や差支なきか。
（三）　左の文に於ける・思想發表の方式の異同を檢せよ。
　　（我が用ひぬものは人に與へんには若かじ。
　　（我が用ひぬものは人に與ふるがよし。

三　友なる寫眞師に

尾崎紅葉

拜呈。　然れば、本日の上天氣、春光を閑却するに堪へず、加

郊外　野外　近郊

技倆　技術　技能

ふるに、數日來散歩を廢し居り候ことゝて、遊意頻に動き候に、一昨日持ち歸り候サイクロンカメラの未だ一着手をも經ざるありて、旁、此の日をあだに過ごし難く、或は課題「途上所見」の好圖樣を得る事もあらんかと、遽かに思ひ立ちて、早稻田邊までと志し候・は午後一時頃にこれあり候ひき。

鶴卷町より郊外に出づれば、直ちに一面の榛木林にて、木隱れて、獨り畑打つ・男居たり。　前年、小生が銃獵を始め候ひし日、下駄掛にて鵙・鶫・などを追ひ廻し候ひし・も此の邊にて、其の頃所持せし廿八番形村田銃と其の手腕と・今日の手提カメラと其の技倆と・は、何ぞ相似たるの甚だしき、

と、心私かにをかしく存じ候。

此の畑打、畫にはなるべし、寫眞には如何、と思ひ止まり、田を横ぎりて、關口の堤に出でん、と、畦道づたひに參り候際、西北の空に、一抹の嫩雲有りて、慵げに懸かり候・が甚だ面白く覺え候故、遙かの岡に、遠樹の聳の如くなる・を添景として、此の春雲を寫さんものをと、或は縱に横に、或は右に左に、或は高く低く、頻に位置の工夫を致し候ひしひまに、微風起こりて、雲はいづれへか消え失せ申し候ひぬ。　かゝる例は予が銃獵に於いても屢遭逢せし所に御座候。

去って、野水の橋を尋ね候。　途に、二小兒の魚を汲むに遇ひ候へ・ば、暫く立ち留まり候處、笊持てる子の水底を撈（カイサグ）る

明喩法

とて、小き臀をあげたる樣の面白きに、取り敢へずこれを一照し、再び彼の榛木林の方を望み候へば、先のやうに宜しくは候はねど、また、暖雲の緩く横たはりて、眠れる如き・が顯れ候間、手早く寫し取り候。　憚りながら御安心下されたく候。

芭蕉庵の下を過ぎて、三四町參り候・程に、芹・嫁菜・の路も興盡きたれば、拔け道を覓めて高田町の大通に出で、雜司ヶ谷まで一延と進み候へど、一路の單調殆ど忍ぶべからず。ぶら〳〵と引き返して、日本女子大學校の前に來たり候。先年、此の釁の教授戸川殘花氏より、女生の料理を饗せんとて、招待致され候事これあり候ひしに、折惡しく胃病中

暗喩法

にて不參致ししを、今日あたり其の人に遇ひもせば、一椀の珈琲などこそねだるべき・に、など、勝手の事を考へつゝ、やがて、目白不動に着し、老樹の下に息ひ居り候時、鐘樓に人登りて、三時を撞き申し候ひき。

坂を下りて、音羽町にいづれば、小日向臺町の盡くるところ、久世山の岡高く面を壓して、頂上に扶疎たる老木を點じ、樹下に兩三の人影を着けたり。　此の岡は矢來町の盡頭より見通しの北に方りて、一風情あるたゝずまひと常に見遣り候。　其の麓に、今、恰も出でたれば、一たびは攀玩の興を取るべしと思ひ、ほとんど壁立せる峻路を躡むこととて、倦脚しば〳〵危かりし・が、登りつむれば、地濶く、坦

かに・して、二箇所にロオンテニス場あり。細草を藉きて、暫く臨眺の眼を縱にすれば、輕風慢く來たりて、澹雲掇るがごとく、眼下の蔓は水有らざるに何の鱗ぞ、人馬の行くは誰が袖こぼれし芥子人形か、と見慣れし景もバーヅアイビウの新しく、傍なる崖際の樹根に三少年の指顧し立てるを背面より竊かに一照致し候。こゝに烟を喫して、後、茶を憶ふこと甚だし。家も近ければ、はや歸らん、と、脇道の易きを下りて、道を改代町に取り、赤城坂を登りて、通(トホリ)寺町に出で候。此の間、始終「途上所見」に氣を配り候へども、何等の得る所なく、打ち疲れて家に入れば、家内出拂ひて浴に赴きたる留守なり。先づ嬉しきは爐上の鐵瓶沸々として煮えたり。早速、茶をいれん、と、獨り犇かす・折から、岩代梁川なる松濤子の、干柿を贈り來たる・に會ひ、直ちに包をときて、其の一箇を喫して、濃緑の熱茶に嗽ぐ。快言ふべからず。乃ち、其の勢に乘じ、無性の筆を驅りて、この文を綴り申し候。撮影の結果・技倆の巧拙・及び、機械の精麁・等は、近日參店の上、暗室中にて、萬々貴意を得申すべく候也。草々以上。(紅葉書翰抄)

○演習

(一) 左の語を漢字にて書け。

ぎりゃうのこうせつ。たんてうひしゃみ。きゃうみしん〳〵。いっすゐのゆめ。ばんさんのきゃうおう。

(三) 左の文句の類句を作れ。

眼下の甍は水あらざるに何の鱗ぞ。
人馬の行くは誰が袖こぼれし芥子人形か。

(三) 本文中の明喩・暗喩を指摘せよ。

(四) 本文を普通の記事文に改めんには、如何なるところを如何に改むべきか。

啓龕開扉
開帳
除幕

四　進學ノ喩*

柴野栗山

三月二十二日詰旦ニ輕裝シテ路ヲ東寺ノ南ニ取ル暮春ノ天氣風日和煦ナリ加フルニ西山ノ吉峯大士像ノ啓龕アリ都人士女相將ヰテ行イテ香ス輿スル者騎スル者負フ者抱ク者絡繹トシテ路ニミツ吾レ獨行ニテ心孤ナルヲ以ッテ謾ニ路人ト問語シテ相勞ハリ火ヲ乞ウテ煙ヲ吹キ果ヲ分カチテ渴ヲ醫シ行ク〳〵相詼諧シテ自ラ慰ム但吾レハ前途遼遠ニシテ心遽シク脚忙シキヲ以ッテ近郊ノ遊人ト漫歩逍遙スルコト能ハズ一人ト言ヒテ未ダ了ハラザルニ又前人ト語ル此クノ如キコト數人ナル後ニ初メ與ニ言ヘル者ヲ顧ミレバ既ニ數里ノ後ニ在リテ復眉目ヲ辨ズベカラズ半日ノ後ハ山轉ジ林蔽ヒ杳トシテ影響ヲ見ザルナリ吾レ思フニ嚮ノ數人ト足ヲ擧ゲ歩ヲ進ムルコト之レヲ一歩ノ間ニ校ブレバ其ノ爭フ所ハ多シトイフトモ寸ヲ以ッテスルコト能ハズ惟、數分ノ多キヲ積ミ漸ク進ンデ先ンゼルナリ初メ其ノ數十百歩ノ相前後セル亦便旋佇立ノ頃ニ猶一蹶シテ及ブベシ半

羸弱
屠弱
虚弱

日ノ後ハ復一蹶ノ庶幾スベキニ非ズ此クノ如クニシテ十日ノ後ニ至ッテハ輕車駿馬アリトイフトモ企望スベキ所ナカラントス我レ羸弱ニシテ歩ニ艱メリ而シテ彼レ皆老幼婦女ニ非ザルナリ然ルニ我ガ能ク漸ク彼レニ先ンジテ進メル所以ハ何ゾヤ此レ他ナシ彼レノ期スル所ハ十數里ノ内ニ在リ故ニ其ノ心怠レルナリ我レノ期スル所ハ數百里ノ外ニ在リ故ニ其ノ心勤メタルナリ吾レ是コニ於イテ學ノ方ヲ曉リヌ請フ諸君數百里ノ外ニ期シテ一歩ノ功ヲ忽セニスルコトナクンバ可ナラン

（栗山文集）

○演習

伐るる
切るる
斬るる
剪るる

（一）左の漢語を口語に改めよ。

前途遼遠　漫歩逍遙　羸弱　詼諧

（二）左の語句に誤あらば正し、且つ、その理由を述べよ。

行ヒテ香ス。　火ヲ乞フテ煙ヲ吹ク　才衆ニ抜ンズ

五　高名の木のぼり

兼好法師

高名の木のぼりといひしをのこ、人を控てて、高き木にのぼせて、梢を伐らせしに、いと危く見えし程は、いふこともなくて、下るゝ時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな。心して下りよ。」と詞をかけしを、「かばかりになりては、飛びおるとも、おりなん。いかに、かくいふぞ。」と申ししかば、「その事に候ふ。目くるめき、枝危きほどは、おのれが恐れ侍

れば、申さず。あやまちは、安きところになりて、必ずつかまつる事に候ふ。」といふ。

あやしき下臈なれども、聖人の誡にかなへり。（徒然草）

○演習

（一）「いかにかくいふぞと申ししかば、」上の文の品詞を類別せよ。

（二）「その事に候ふ云々」を今日の普通文に改作せよ。

（三）「候ふ」と「侍り」とは、その意義にいかなる差異あるか。

六　松下禪尼

兼好法師

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝ事ありけるに、煤けたるあかりさうじの破ればかりを、禪尼、手づから、小刀して切りまはし、つゝ、張られけれ。

かくてあるべきなり
さてあるべきなり

ば、せうとの城介義景、其の日のけいめいして候ひけるが、「賜はりて、なにがし男に張らせ候はん。さやうのことに心得たる者に候ふ。」と申されけれ。ば、「其の男、尼が細工に、よもまさり侍らじ。」とて、猶ほ一間づつはられける。を、義景、「皆を張りかへ候はんは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも見ぐるしくや、」と、重ねて申されけれ。ば、「尼も、後はさは〳〵と張りかへん、と思へども、今日ばかりは、わざと、かくてあるべきなり。」「物は破れたる處ばかりを修理して用ふる事ぞ。」と、若き人に見ならはせて、心づけん。ためなり。」と、申されける。いと有り難かりけり。

世を治むる道、儉約をもととす。女性なれども、聖人の心

にかよへり。天下をたもつ程の人を子にもたれける、誠にただ人にはあらざりけり、とぞ。（徒然草）

○演習

（一）本文につきて、今日の普通文としては適當ならざる語句を指摘し、且つ、これを適當なるものに言ひかへよ。

（二）左の語に漢字をあてよ。

さうじ　さうぢ　せうと　けいめい　まだら

（三）本文を、今の口語にして、口演せよ、互の身分・關係などのよくあらはるゝやうに注意して、

七　地球の未來

横山又次郎

地球の未來は如何。これを知ること難きにあらず。殷鑑遠からず、月に在り。地球は、昔より、漸次冷却し來たり、今後と雖も、なほ、絶えず、冷却すべし。これ、正に、我が地球上の生物を滅亡の域に誘ふ者にあらずして、何ぞや。その故如何、と尋ぬる・に、生物が地球上に生活するは、決してその内部の熱に賴るものにあらずして、全く太陽の放つ光熱の餘惠に賴れり。故に、地球が單に冷結するのみならば、其の冷結は、中心に達すとも、敢へて憂ふるに足らざれ・ども、この冷結の結果として、必ず氣水の吸收を伴なふ。是れ實に恐るべきものなり。

敢へて憂ふるに足らず恐るゝを要せず

地の中には、到る處に、多少の水ある・は、人の能く知る所なり。井戸の水あるは、地中に水あればなり。隧道に水の滴るは、地中に水あればなり。鑛山の坑内に水の多きは、

沿ふ　添ふ　副ふ

冷却　忘却　賣却

是れ、亦、地中に水あればなり。　これらの水は、皆、地上より、岩石の罅隙に沿ひて、浸入する・ものにして、岩石の存する處には、多少存在せざることなし。　然るに、現今に在りては、地球の内部甚だ熱き・が故に、地の底三里以上の深さには、水は、最早進入すること能はず。　進入せんとして、こゝに至れ・ば、高熱のために、忽ち溫められて、水蒸氣となりて、上昇す。　然るに、地球冷却して、其の内部に漸く岩石を增すに至ら・ば、これに連れて、水は益、内部に進入し、地球の全く冷却する時には、現今地上に在る水は盡く中心に吸收せらるゝに至るべし。

水は、獨り、岩石の罅隙によりて吸收せらるゝ・のみならず、

消費　消耗

亦、岩石を組み成せる鑛物の中にも吸收せらる。　卽ち、此の鑛物の中には、水を化合的に含むもの多し。　故に、地球の内部の熔液體が新に岩石となれば、其の中の鑛物は、亦、必ず、多少の水を吸ふ。　是れ、一見、甚だ少量なるが如くなれども、時を經ること久しきに亙らば、亦、著しく地上の水を減少せしむるならん。

大氣中の瓦斯も、亦同じ。　岩石、風化・分解・すれば、炭酸石灰・炭酸苦土・炭酸鐵・等の如き炭酸化合物を生ずるものなり。　これがため、大氣中に存する炭酸瓦斯の消費せらるゝこと、實に夥し。　又、軟體動物・珊瑚・海膽・等の如き、其の・骨骼・介甲・を作るに炭酸石灰を要するもの・は、海水中より炭酸瓦

斯を取ること多し。而して、この瓦斯の最も多量を費やすものは植物なり。植物は空中の炭酸を吸ひ、其の炭素を取りて、木纖維を作るものなり。而して、此の炭素の一部は、植物の腐敗する際、再び、炭酸と爲りて、空中に歸り去る、と雖も、其の大部分は、石炭に變じて、固く地中に繫留せらる。又、空中の酸素は、鐵及び、亞酸化鐵と化合して酸化鐵となり、酸化鐵は更に水と化合して水酸化鐵となる。故に、地上の炭酸と酸素とは絶えず其量を減じ居るものにして、是れ、亦、一見、甚だ些細なるが如くなれども、年月を積んで、久しきに亙らば、其の結果に著しきものあらん。唯、今日までに、其の成行の明かならざるものは窒素なり。

災厄
災害
災難
罹災

故に、此の瓦斯のみは、水・炭酸・及び、酸素の、地上より消失せし・後と雖も、なほ殘存するなるべし。

前に陳べたる所によつて觀るときは、水・及び、大氣の減少は、地球の冷却と共に、免るべからざる災厄なり。然るに、一方には、此の減少を多少補塡するものあり。卽ち、地球內部の水蒸氣と瓦斯となり。此れらが地球內部の熔液體の中に夥しく吸收せられ居るは、現に、火山より流出する熔岩の證據立つるところにして、實に、其の冷結する際には、多量の水蒸氣・及び、瓦斯・殊に、炭酸瓦斯・を放出するなり。故に、地球が全く冷結するまでには、其の內部より莫大の水と瓦斯とを出だすべし。

かくの如く、地球冷却の結果として、一方には、水・酸素・及び、炭酸・の消失あれども、一方にはこれが供給あり。然らば、此の供給の分量は、果たして、消失の分量を償ふに足るものなるか。此の點に就いては、吾人聊か疑なき能はず。

まづ、彼の火星を看よ。彼れは我れより小にして、且つ、太陽を距ること我れより遠けれ・ば、諸般の狀態、我れに一歩を進めたる・觀あり。而して、彼の面に、陸の多くして、海の少なき・は、地球の將來を豫報するには非ざるか。又、月を看よ。是れは我が地球に數歩を進めたる冷結體なり、死滅體なり。而して、かの面には、氣水共になきに非ずや。是れを以つて推すときは、我が地球も、亦、早晩、彼れらの轍を踏むに至るなるべ・し。（地球の過去及び將來）

○演習

(一) 左の語の意義の異同を問ふ。

生物　冷却　内部　熔液　些細　浸入
動物　冷結　中心　溶液　少量　侵入

(二) 「此の點に就いては吾人聊か疑なき能はず」、此の形にならひて、新に短文を作れ。

(三) 「彼の面に……將來を豫報するにはあらざるか」を平敍の文に改めよ。

(四) 左の語を用ひて各〻一の短文を作れ。

般鑑　前車の轍を踏む

八　吾が故郷

志賀重昂

「江山洵美是吾鄉」と。人、誰れか、吾が鄉の洵美を謂はざる

者あらん。

青島は南洋浩渺の間なる一頃の噴火島なり。轟然爆裂して、火光閃々として天日を燒き、石を降らし、灰を散じ、島中の人畜殆ど斃れ盡く。僅かに十數人の、船を艤して、災を八丈島に逃れたる・あるのみ。しかも、此の十數人、竟に、其の噴火口たる故郷を遺却せず。火の熄むを待つこと十三年。乃ち、八丈島を出でて、欣々として、其の多災なる故郷に歸りき。

占守は窮北不毛の絶島、層氷・累雪・の處なり。開拓使有司の、其の土人を南方色丹島に遷徙せしむる・や、色丹の地棋楠樹蒼く、落葉松綠に、流水涓々として處々に走り、玉蜀黍

涓々滾々　潺々滾々　滔々洋々

收むべく、馬鈴薯植うべく、田園を開拓する者は賞與の典あり。しかるに、遷徙の土人はこの新樂土を悅ばずして、時に、或は其の窮北不毛の故島に歸り去らんとするものありき。

シカゴ博覽會は、當時に於ける人智の粹を盡くし、會場も亦、金碧燦爛、眩燿眼を奪ふ。中に、エスキモー土人の村落を設け、土人を此處に居く。しかも、土人はこれを欲せず、其の・氷山・雪塊・の本國に逃れ去らんとしき。

脆きは人の情なり。誰れか吾が郷の洵美を謂はざらん。是れ一種の觀念なり。

然れども、日本人が日本江山の洵美を謂ふは、何ぞ啻に其

絶對
相對

宛然
さながら
恰も

の、吾が郷に在る・を以つてならんや。實に、絶對に、日本江山の洵美なるものあるを以つてのみ。見よ外邦の客、皆、日本を以つて宛然たる・現世界に於ける・極樂土となし、低回、去る能はざるにあらずや。

花より明くるみ芳野の春の曙みわたせば、
もろこし人も高麗人も大和心になりぬべし。

といふもの、卽ち、是れなり。想ふに、浩々たる造化、其の天工の極を日本國に鍾む。是れ日本風景の渾圓球上に絶特なる所以なり。（日本風景論）

○演習

（一）「脆きは人の情なり、」この文の意味を反語の文・及び、感嘆の文・に綴れ。

のどか
長閑

（二）左の漢字の各、につきて、熟字を作れ。

美　遷　悅　觀

（三）引用法を用ひて文を作れ。

九　埴生の宿

埴生の宿も　わが宿。
玉のよそひ　羨まじ。
のどかなりや、　春の空。
はなはあるじ、　鳥は友。
おゝ、わが宿よ。　樂しともたのしや。」
文よむ窓も　わが窓。

瑠璃の床も　羨まじ。
きよらなりや、　秋の夜半。
月はあるじ、　蟲は友。
おゝ、我が窓よ。　樂しともたのしや。」（中等唱歌集）

○演習

(一) 本文中に轉倒法を用ひたる所を指摘せよ。
(二) 本文の語句につきて、省略したる語句あらば、補ひみよ。

一〇　仁和寺の法師

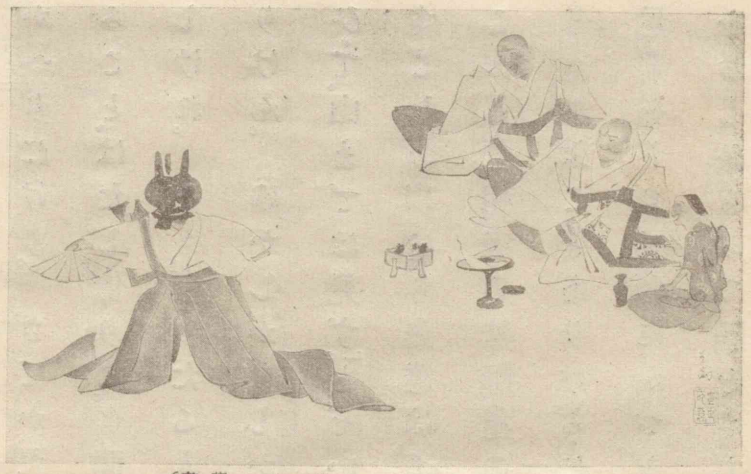
兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を拜まざりけれ・ば、心うくおぼえて、ある時、思ひ立ちて、ただ一人、かちよりまうでけり。極樂寺・高良・などを拜みて、かばかりと心得て、かへりにけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつることは、はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、參りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ參るこそほいなれ、と思ひ・て、山までは見ず。」とぞいひける。

すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、各、あそぶことありける・に、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて、頭にかづき・たれば、つまるやうにする・を、鼻をおしひらめて、顔をさし入れ・て、舞ひ出でたる・に、滿座興

に入ることかぎりなし。しばしかなでて、後、拔かんとするに、大方拔かれず。酒宴ことさめて、いかがはせんと惑ひけり。とかくすれば、頸のまはりかけ・て、血垂り、ただはれにはれみち・て、息もつまり・ければ、打ち割らんとすれ・ど、たやすく割れず、ひびきて、堪へがたかりけれ・ば、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷衣を打ち懸けて、



鼎かづき（浮田一蕙畫）

道すがら
夜すがら
夜もすがら

手を曳き、杖をつかせ・て、京なる醫師のがりゐて行きける・に、道すがら、人の怪しみ見る事かぎりなし。醫師のもとにさし入りて、むかひゐたりけん・ありさま、さこそことやうなりけめ。物をいふもくぐもり聲に響きて、聞こえず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる敎もなし」といへば、また、仁和寺へ歸りて、親しき者・老いたる母・など枕上に寄り居て、泣き悲しめ・ども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、あるものの云ふやう、「たとひ耳・鼻・こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。ただ、力を立てて、引き給へ」。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねをへだてて、頭もちぎるゝばかり引きたる・に、耳・鼻、かけうげながら、拔け

にけり。辛き命まうけて、久しく病み居たりけり。（徒然草）

○演習

(一) 左の熟字にあるかぎりの讀み方をつけよ。

醫師　法師　酒宴　先達

(二) 左の。のつきたる語の別を問ふ。

枕上によりゐて泣く　くすしのがりゐて行く

(三) 左の文句の時を正しくせんには、いかに改むべきか

仁和寺にある法師年よるまで拜まざりければ……

滿座興に入ることかぎりなし。しばしかなでて、後、拔かんとするに、大方拔かれざりき。

(四) かばかりと心得」につきて省かれたる語を補へ。

(五) 左の文の空所を塡字せよ。

たとひ□とも□などか□。

死母

一一　先妣西谷氏碑陰ノ記

山田方谷

先妣
先考

嗚呼、我ガ先妣ノ歿シタマヒシハ文化戊寅仲秋ノ念七ナリキ。遙々タル星霜、今、始メテ、茲ノ碑ヲ修ムルコトヲ得タリ。蓋シ、待ツコトアリテ、然リシナリ。

衰落
零落

妣ハ西谷君・諱ハ、信敏・ノ女ニシテ、本州小阪部ニ生マレタマヒキ。我ガ先考ニ配シ、球・及ビ、弟妹・各、一人ヲ生ミタマヒヌ。

考、常ニ、家ノ、本ハ武門ニシテ、中葉ニ、衰落シ、久シク農伍ニ混ゼル・ヲ痛ミ、球ヲシテ、幼ヨリ松隱丸川先生ニ從ウテ、文ヲ學バシメタマヒキ。屢、戒シムルニ、祖ヲ繩ギ、家ヲ興コス・事ヲ以ッテシタマヘバ、妣必ズ傍ヨリ之レヲ贊シタマヘリ。一日、球ガ髮ヲ撫デテ、告ゲテ曰ハク、「佳兒、必ズ克ク

肝ニ銘ス
胸ニ刻ム

涕泣
哭泣
慟哭

父ガ志ヲ成サン。然レドモ、崛起シテ勢ニ乘ズレバ、顚躓セザル者鮮シ。汝、終ヲ令クセバ、吾ガ願ハ足リナン。」ト。

球、時ニ髫齔ナリシガ、肝ニ銘シテ忘レザリキ。

妣、歿シタマフ前、旬餘、羸憊シテ蓐ニ在シケルガ、尙ホ球ヲ促シテ師ノ家ニ往カシメタマフ。球、枕上ニ就イテ拜別シテ、涕泣スレバ、叱シテ、去ラシメタマヒキ。既ニシテ、病革レリト聞キテ、深夜ニ馳セ還レバ、已ニ纊ニ屬シタマヒニキ。齡僅カニ四十。考モ、亦、其ノ翌歲ニ、歿シタマヒヌ。

球トキニ成童ニシテ、煢々トシテ孤弱ナリキ。然レドモ、二庭ガ平生ノ訓ヲ憶フ毎ニ、悲憤胸ニ塡チヌ。コヽヲ以ッテ、奮志・困學・シ、遂ニ、儒ヲ以ッテ褐ヲ本藩ニ釋キ、荐リニ顯要ヲ歷テ、藩政ニ參スル・ニ至レリ。文久二年、江戸ニ在リテ、召サレテ大將軍ニ謁シ、尋イデ、疾ヲ謝シテ致仕シ、弟ノ子ヲ養ウテ嗣トス。然レドモ、恩遇優渥ニシテ、藩ニ大事アレバ必ズ議ニ與カリ、平居ハ鄕ニ歸リ、優游シテ、老ヲ養フヲ得シメラルル。則チ、當日撫髮ノ訓、コヽニ於イテ、纔カニ答フルコトヲ得タリ。シカラバ、茲ノ碑ノ、今日ニ待ツアリシ・コト、豈ニ已ムヲ得ンヤ。

山田方谷書

姙來タリ歸ギタマヒシ初、家尙ホ窘乏ニシテ、考ヲ助ケテ産ヲ始メタマフニ、勤苦、萬狀ナリキ。後ニハ、ヤ、裕カナリシカドモ、竹笄・布裙ニシテ、儉素ナルコト素ノ如クナリキ。シカモ球ガ學資ヲ給スルニ至ッテハ、毫モ顧惜シタマハザリキ。球ノ拙劣ナルモ、其ノ遺資ニ賴リテ、業ヲ成シテ、今日ニ至ルヲ得シ・モノハ、抑、亦、誰レノ力ゾヤ。因リテ、併セ錄シテ、罔極ノ德ヲ紀ス。

慶應三年秋八月、六十三齡ノ老兒山田球拜撰ス。（方谷遺稿）

○演習

(一) 左の文句の意義を、他の文句にて、いひあらはしみよ。

蓋し待つことありて然りしなり。

今日に至るを得しものは抑、亦誰れの力ぞや。

(二) 左の文字の用例を示せ。

死　歿　卒　逝　薨　崩

(三) 左の句を解釋せよ。

父無くんば何をか怙まん、母無くんば何をか恃まん。

怙恃を喪ふ。

これが德に報いんと欲すれども、昊天極り罔し。

罔極の德を紀す。

(四) 本文各段の大意を述べよ。

一二　漢詩二首

出デント欲シテ壁ニ題ス　釋　清狂

男兒立志出鄕關。
男兒志ヲ立テテ、鄕關ヲ出ヅ。

學若不レ成死不レ還。
埋レ骨何期墳墓地。
人間到處有二青山一。

人間
世間

失題

世評紛々亂如レ絲。
不二是諛辭一卽妬辭。
磨得一團方寸鏡。
自家妍醜自家知。

○演習

(一) 本文の第一首を諳寫せよ。
(二) 失題の詩の如くにせば、あまり自ら用ふるに過ぎはせずや。いかん。

學若シ成ラズンバ、死ストモ、還ラジ。
骨ヲ埋ムルニ、何ゾ期セン、墳墓ノ地。
人間、到ル處ニ、青山アリ。

松林飯山

世評紛々トシテ、亂レテ、絲ノ如シ。
是レ諛辭ナラズンバ、卽チ、妬辭。
磨キ得タリ、一團ノ方寸鏡。
自家ノ妍醜ハ、自家知ル。

一三 俳句の感興*

俳句は形短けれど餘情ありて玩味すべきもの少なからず

早乙女やなく子のかたへうゑて行く
わかれても闇にみにくる幟かな
此の句どもを吟ずれば親の子を思ふ情思ひやらるすれずれの中に花咲く木賊かな
此の句は豐後國のある片山里に貧しく暮らして子一人もてる夫婦有りけるが何やらん心に違ふことありてをとこかの女房を離別しければ女房悲しく思ひてさまざ

まわびけれども聞き入れざりければ止むことを得ず家を立ち出づる時此の句をいひ出だししかば夫感得して呼び戻したりとなり

賤の男
賤の女
山がつ

遠江國天龍川の邊に老いたる賤の男孫を失ひて其の翌年の七月于蘭盆と云ふに彼の孫が位牌に靈供を備ふとて

去年まで叱った瓜を手向かな

此の句を吟ずれば恩愛の情涙も落つるばかりなり

貧うた子に髪なぶらるゝ暑さかな

園女が句なり極暑の樣子察しやられ實に女の句としらる加賀の千代女が夫に別かれし時の句に

蘊奥
奥義
秘奥
極意

起きてみつ寐てみつ蚊帳のひろさかな

是れ亦其の場合の容態思ひやらるゝなり何事も上手に至れば自然の妙あり其角が句に

夕立や田をみめぐりの神ならば

にて雨をふらし不角が

賴政がひろひ殘しし椎もがな

にて位にすゝめり其の道の蘊奥に至りては歌も句も人情を和する所格別の相違有るべからず

去りし年総州邊にて俳諧を好むひとり者の方へ盗賊入りて器財悉く盗み取れり彼の俳諧人を手嚴しく柱にくゝり附けてちっとも動かさず俳人のいふやう我れ少し

の望あり今かくの有様になれば金錢財寶一つとして惜しからずしかし一つの願あり笈の内に入れ置きたる宗祇自筆の伊勢物語と床の間に置きたる末の松山の文臺とをば我れにあたへ給へといひければ賊將聞き屆けていとあらけなく取り出だして投げやり俳人の繩目をゆるして盗賊どもは出で行きけるがさるにても只今かれが乞ひたる書物と文臺とは結構なるものにや立ち歸りて奪ひとらんとて戸外にたゝずみて内の様子を伺ひけるに俳人は屈する色もなく燈かきたてて筆と紙とを手に持ちながら

聞き屆く　聽許す

たゝずむ　佇立す

ぬす人も跡とざし行く夜寒かな

狼藉　亂暴

はつか　わづか

とくり返しくり返しひとり吟じゐけるに盗賊等此の句にめでて大いに感じ今宵奪ひ取りたる道具どもを悉く返しあたへかゝる無慾なる面白き人とはしらず狼藉したりとて金を多くあたへけるをあへて取る事なかりしを四五日もたちていづくよりともなく樽肴に熨斗包み添へて竈の前におきて歸りけり察する所彼の盗賊等のわざなりしなるべし

實に其の道に至りては鬼神をも感ぜしめたけき武士の心をもなぐさめ男女の中をも和らぐはつかの一端とはいひながら其の感應深く思ふべし（雨窓閑話）

○演習

(一) 左の文を適當なる漢字交りに書き改めよ。

はなになくうぐひす・みづにすむかはづ・のこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれか、うたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めにみえぬおにかみをもあはれとおもはせ、をとこ・をみな・のなかをもやはらげ、たけきもののふのこゝろをもなぐさむる・は、うたなり。

(二) 「かな」と「がな」との別を問ふ。

(三) 不角の句の趣向に倣ひて、別の句を作りみよ。

(四) 本文に句讀點を施せ。

一四　俳句春秋

これは、これは、とばかり、花のよしの山。　貞室

春の海、ひねもす、のたり〳〵かな。　蕪村

五月雨や、ある夜ひそかに松の月。　蓼太

水澄みて、もみの芽あをし、苗代田。　支考

名月や、疊の上に松のかげ。　其角

行水のすてどころなし、蟲の聲。　鬼貫

雪の日や、あれも人の子、樽拾ひ。　冠里

いざさらば、雪見にころぶところまで。　芭蕉

○演習

(一) 本課中のいづれの句が最も面白く感ぜしか。

(二) 本課の各句の餘韻のあるところを述べよ。

(三) 本課の外になほ面白く感じて記憶せる句あらば、述べよ。

一五　笠置の御沒落

さる程に、類火東西より吹かれて、餘烟皇居にかゝりけれ

そことも知らず
いづこともなく
行くへ定めず

ば、主上を始め參らせて、宮々・卿相・雲客、みな、かち跣なる體にて、いづくを指すともなく、足にまかせて、落ち行き給ふ。此の人々、初め一二町が程こそ主上を扶け參らせて前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく、道暗う・して、敵の鬨の聲、こゝかしこに、聞こえけれ・ば、次第にわかれ〳〵に成りて、後には、只、藤房・季房・二人より外は、主上の御手を引き參らする人もなし。　忝くも、十善の天子、玉體を田夫・野人・の形に替へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける・御有樣こそあさましけれ。　いかにもして、夜の中に、赤坂の城へ、と、御心ばかりは盡くされけれ・ども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心ち

とかうして
とかくして
かくて
やがて

して、一足には休み、二足には立ち止まり、晝は道の傍なる靑塚の陰に御身を隱させ給ひて、寒草の疎かなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ原野の露分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。　とかうして、夜晝三日に、山城の多賀鄕なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。

藤房も季房も、三日まで、口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れ・て、今は、いかなるめにあふとも、逃れぬべき心ちせざり・ければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣・兄弟、諸共に、現の夢に臥し給ふ。　梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞こしめされて、樹の陰に立ち寄らせ給ひたれ・ば、下露のはら〳〵と御袖にかゝりける・を、主上御覽ぜられて、

舉げばや
舉げなん

さして行く笠置の山を出でしより、
あめのめが下には、隱れがもなし。
藤房卿涙をおさへて、
いかにせん、賴む陰とて立ち寄れば、
なほ袖濡らす、松のしたつゆ。

山城の國の住人・深須入道・松井藏人、二人、此の邊の案内者なりければ、山々峯々殘る所なく搜しける・間、皇居隱れなく尋ね出だされ給ふ。主上、誠に怖ろしげなる御氣色にて、「汝ら心ある者ならば、天恩を戴きて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄かに心變じて、「あはれ、此の君を隱し奉つて、義兵を舉げばや。」と思ひけれど

だにすらさへ

警固
警護
護衛
警蹕

も、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事漏れ易くして、道の成り難からん・事をはかりて、もだしけるこそ、うたてけれ。俄かの事にて、網代の輿だに無かりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せ參らせて、まづ、南都の內山へ入れ奉る。其の體、只、殷湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降せ・し昔の夢に異ならず。是れを見る人毎に、袖をぬらさずといふことなかりけり。

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞、三千餘騎にて路を警固仕りて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。其の日、關東の兩大將、京へは入らずして、すぐに宇治へ參り向かうて、龍顏に謁し奉り、まづ、三種の神器を渡し給はつて、持

明院新帝へまゐらすべき由を奏聞す。主上、藤房を以つて仰せ出だされけるは「三種の神器は、古より、繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時、自ら是れを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて、しばらく天下を掌に握るといへども、いまだ、その三種の重器を自らほしいまゝにして、新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所は、笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて、戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひつらめ。神璽は、山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂には、よも、吾が國の守とならせ給はぬ事あらじ。寶劍は、武家の輩もし、天罰を顧みずして、玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させ給はんずるために、暫くも御身を放たるゝ事あるまじきなり。」と仰せられければ、東使兩人も六波羅もことばなくして退出す。

いへども
いふとも

天罰
神罰
冥罰

翌日に、龍駕を廻らして六波羅へ成しまゐらせんとしけるを、前々臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を強ひて仰せ出だされける間、力なく、鳳輦を用意し、衮衣を調進し、ける間、三日まで平等院に逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事かはりて、鳳輦は數萬の武士に打ち圍まれ、月卿・雲客は怪しげなる籠輿・傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ、河原を上りに、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しい

逗留
滯留
滯在

對句

かな、昨日は、紫宸、北極の高きに座して、百司禮義の裝をつくろひし・に、今日は、白屋、東夷の卑きに下らせ給ひて、萬卒守禦のきびしきに御心を惱まさる。　時移り、事去り、樂盡きて、哀來たる。　天上の五衰・人間の一炊、ただ夢かとのみぞ覺えたる。　遠からぬ雲の上の御住居、いつしか、思しめし出だす御事多きをりふし、時雨の雨、一通り、軒端の月に過ぎけるを聞こしめして、

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ、
音をきくにも袖はぬれけり。

四五日ありて、中宮の御方より御琵琶を遣はさるゝに、御文あり。　御覽ずれば、

四ツの緒
四絃琵琶

思ひやれ、塵のみ積もる四つの緒に、
拂ひもあへずかゝる涙を。

引き返して御返事ありけるに、

涙ゆゑ半ばの月はくもるとも、
共にみし夜のかげは忘れじ。（太平記）

○演習

(一) 本文の中より敬語を指摘せよ。
(二) 「晝は道の傍なる青塚の云々」を他の語に言ひ替へみよ。
(三) 左の語句を漢字の熟字に改めよ、
　雲の上の御住居　かちはだし　もだしがたし　せんかたなし
(四) 「思ひやれ云々」の御歌を文語にて説明せよ。
(五) 「よも……あらじ」を用ひて短文を作れ。
(六) 「だに」又は「すら」を用ひて短文を作れ。

一六　最後の參内

さても、今年兩度の合戰に、京勢むげにうちまけて、畿内多く敵の爲に犯し奪はる。遠國、亦、蜂起しぬ、と告げければ、將軍・左兵衞督・の周章、只、熱湯にて手を洗ふが如し。今は、末々の源氏・國々の催し勢・などを向けては、叶ふべしとも覺えず、とて、執事高武藏守師直・越後守師泰・兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海・二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢、雲霞の如く、淀・八幡・に著きぬ、と聞こえしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時・一族うちつれて、十二月二十七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以って申しけるは、「父正成、

宸襟
叡慮
聖哀

死に殘り
生き殘り

尪弱の身を以って大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ・候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國よりせめ上り候ふ・間、危きを見て命を致す所、かねて思ひさだめ候ひけるかに依って、つひに、攝州湊川にして、討死仕り候ひ畢はんぬ。其の時、正行十一歳にまかりなり候ひしを、合戰場へは伴なはで、河内へ歸し、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅ぼし、君を御代に卽けまゐらせよ。』と申し置きて、死にて候ふ。然るに、正行・正時、已に壯年に及び候ひぬ。この度、我れと手を碎き、合戰仕り・候はずば、且つは亡父の申しし遺言に違ひ、且つは武略のいふ甲斐なき謗に落つ・べく覺え候ふ。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病

早世　夭死　夭折

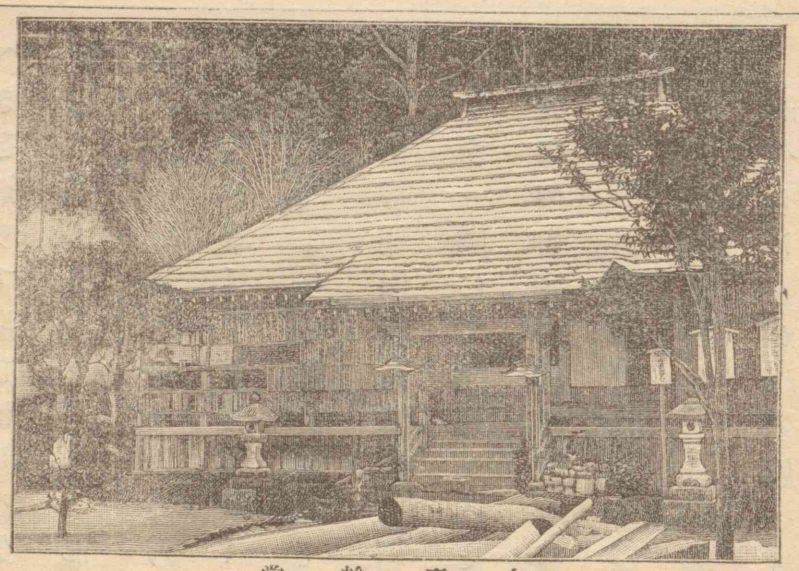
雌雄　勝敗　勝負

玉顏　龍顏　聖容

に犯され、早世仕る・事候ひなば、只、君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不幸の子となる・べきにて候ふ・間、今度、師直・師泰・にかけあはせ、身命を盡くし合戰仕り・て、彼れらが頭を正行が手にかけて取り候ふか、正行・正時・が首を彼れらに取られ候ふか、其の二つの中に、戰の雌雄を決すべきにて候へ・ば、今生にて、今一度、君の龍顏を拜し奉ら・んために、參内仕りて候ふ。」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯はれけれ・ば、傳奏いまだ奏せざるさきに、まづ、直衣の袖をぞ濡らされける。

主上、すなはち、南殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照臨ありて、正行を近く召して、「以前、兩度の戰に

機に應ず　臨機應變



如意輪堂

勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す〳〵も神妙なり。大敵、今、勢を盡くして向かふ・なれば、今度の合戰、天下の安否たる・べし。進退度に當たり、變化機に應ずる・事は勇士の心とする所なれ・ば、今度の合戰、手を下すべきにあらずといへ・ども、進む

最後
最期
末期

べきを知りて進むは時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは後を全うせんが爲なり。朕汝を以つて股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せ出だされければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、只、是れを最後の參内なりと思ひ定めて、退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞以下、今度の軍に一足も引かず一處にて討死せんと、約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき・暇を申して、如意輪堂の壁板に各、名字を過去帳に書き連ねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば、梓弓

なき數にいる名をぞとどむる。

と、一首の歌を書き留め、逆修のためとおぼしくて、各、鬢髮を切つて、佛殿に投げ入れ、その日、吉野を打ち出でて、敵陣へとぞ向かひける。（太平記）

○演習

(一)「危きを見て命を致す所……」と申し置きて死にて候」を今日の普通文に改作せよ。

(二)玉體・叡感・出御・行幸等の如き、特に天皇陛下にのみ申し奉るべき語を知れる限り列擧せよ。

(三)本文につきて、今日の普通文と異なる用語を指摘せよ。

(四)左の譬喩の上に文句を補うて、新しく短文を作れ。

雲霞の如し。　熱湯にて手を洗ふが如し。

Himalaya.
Everest.

Brahmaputra.
Ganga.
Indus.

一七　ヒマラヤ紀行その一

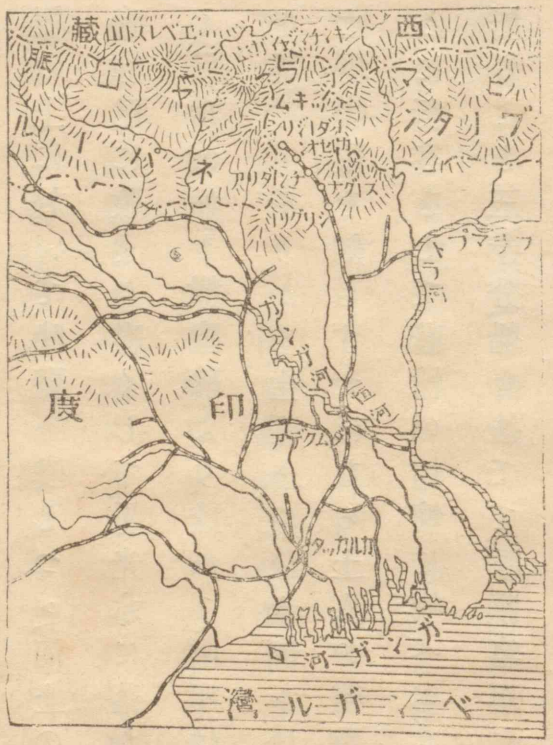
ヒマラヤの四十八大峰、その高さ、何れも、我が富士山の二倍以上にあり。エベレストは世界第一の高峰にて、直立二萬九千九呎に達す。餘脈は姑くこれを措き、其のヒマラヤ本系と稱する者、東西二千哩、印度大半島の北部を劃する大障壁となりて、絶えず印度洋面より吹き送る熱帶の水蒸氣を雪となし、雨となし、以つて、ブラマプトラ・ガンガ・インドス・の三大流を其の南側に吐き出だす。世界最豐饒の平原、これが爲に生じ、世界最古の文明、これが爲に起こり、而して、世界第一の偉人、又これが爲に生まれたり。千古・萬古、遙かに下界の・治亂・興亡・を下瞰して、今猶ほ、世界

壯大雄宕
壯嚴雄偉
豪宕

Calcutta.

Darjiling.

の祕密國たる西藏を背後に包擁す。其の・壯大・雄宕、見ぬ人の殆ど夢想する能はざるところなり。



明治三十三年一月廿四日、午後三時、汽車にてカルカッタ市を發し、印度の北端・西藏の關門たる・ダージリンに向かふ。

七時三十分、ダムクデア驛に達す。恒河（ガンガ）の河畔の停車場なり。恒河の河幅、此の邊は、廣き處、三哩、狹き處も、なほ二哩

半に及ぶ。五百噸の汽船あり、一日五回、汽車の發著ごとに往復す。さて、汽船は徐々に進行を始むるに、乘客は甲板の上に於いて、晩餐を喫しつゝ、河上の風景を貪り看る。晩輝已に收まり盡くして、星光水に落ち、樹木なく、岩石なく、只、灰の如き微塵砂より成れる・兩岸は、糢糊として一線を描く。をりから、生暖き風は水面を拂うて、遠く、又、近く、亡國の恨を知らずがほなる土人の蠻歌を送り來たり、漫ろに行客をして悲愴の情懷に堪へざらしむ。

居ること三十分、船を捨てて、睡眠客車に投じ、翌朝七時、シリグリー驛に達す。こゝにて、再び汽車を乘り換ふ。これより以北をダージリン、ヒマラヤ鐵道と稱す。軌道の

蜿蜒　逶迤

Bengal.

幅纔かに二呎、世界無比の小汽車にて、さながら、玩具のごとし。交通事業に練熟せる・彼の英國政府が、幾多の歳月と莫大の工資とを費やして、辛苦・經營・せる結果の、かくの如くなる・を見ば、地の嶮峻なること、推して知るべし。これよりダージリンまで僅かに五十一哩。一時間十哩の速力を以つて、連山重疊の間、毎時平均一千尺づつの高度を上り行く。忽ち見る、ヒマラヤの一支、雪を戴いて天空を衝き、蜿蜒として南に走るを。快甚だし。

走ること七哩、スーグナ驛に達す。平原、茲に盡き、山勢突兀として、天を支ふる壁のごとく、平原と直角をなして前方を塞ぐ。ベンガル灣頭より此の驛に至るまで三百哩、

臆病
小心

僅かに海拔三百呎を上りしに過ぎず。ダージリンまで剩す所は、只、三十五哩にして、其の間に七千呎以上の高度を攀ぢざるべからざるなり。汽車は急に速力を緩めて、あくまで臆病に、あくまで謹愼に、平原に直立せる一峰に向かって、蛇の如く徐々として這ひ上がれり。此れより以後、或は峰腰を縫ひ、或は巒巓に匍ひ、忽ちにして千古の森林、忽ちにして萬丈の絶壁、右に曲がり、左に折れ、前に在るべき機關車、常にこれを側面に見る。此の間の線路、時にはZの字をなし、時にOの字を形づくり、Uとなり、Sとなり、Wとなる。如何なる旅客も、此の間に在っては、覺えず心臟の鼓動して、雙脚の自然に戰慄する・を見るなり。

白皚々
赤裸々

九時十五分、チンダリア停車場に着き、止まること二十二分、茶菓を喫す。煩蒸の空氣は頓に一變して清涼となり、外套を被て猶ほ寒を訴ふ。植物も熱帶のもの漸く盡きて、溫帶のものとなる。十一時、カーセオンに著す。此の驛、海面より五千呎、ヒマラヤ鐵道の中にて眺望の絶佳なる地なり。仰げば、白皚々たる連嶺、雲海に浮かべる群島の如く前面に連なり、瞰せば、雲の切れ目を通して、ベンガルの大平原、浩茫として涯りなく、恒河の流、日光に映じて、細き銀線を敷きたるが如く遠く眼界の外に去る・を見る。身は恰も輕氣球に乘じて、亞細亞大陸の中央に高翔せる・想あり。午後三時、遂にダージリンに著す。

ダージリンはヒマラヤ山脈中、第二の高峰キンチンジャンガより、直徑四十五哩の距離にある一山脈の半腹に位す。その地、西藏・ブータン・英領印度・ニポール・等に接し、實に、西藏といふ世界の祕密藏を開くべき南方の門戸たり。人口一萬餘、今、英國の保護に歸す。この地、印度總督を始め、印度にある歐洲人が、唯一の避暑地なるを以って、人口年々に増加し行く。

Bhutan.
Nepaul.

一八　ヒマラヤ紀行その二

二十六日、午前二時半、馬の用意既に成れりと聞き、倉皇、食を終へて、庭前に出づ。ダージリンより東南六哩に、タイガーヒルと稱する地あり。最高峰エベレストは、此の地に至りて、始めて壯容を見るを得べし。旭日遙かに印度洋頭に出でて、此の世界至高の大山脈を照らす。は、實に、天下無比の大觀なり。今や、數時の後、此の景に接するか、と思へば、恰も絶世の大偉人に謁せんとするが如き感あり。」

大觀
偉觀
奇觀

馬は徐々として其の深さ・其の廣さ・共に測るべからざる大溪谷に向かへる山腹の石逕を迂る。下弦の月密雲に隱れて、天地森寂、只、蹄聲の戛々として、太古の森林に反響するを聞くのみ。我れらの騎れる馬は西藏駒と稱するもの、體の小なるに似ず、至って强健にして、崎嶇たる山道に馴れ、よく一萬九千呎の高處まで雪を踏みで登りゆく、

心膽
肝膽

といふ。平生騎行に馴れざる我れは、馬の岩石に躓く毎に馬背よりなげ出されんとして、屢〻心膽を寒うせり。五時、タイガーヒルに達す。憾むべし、陰雲四合して、微雪霏々たり。眼前に横たはれるキンチンジャンガの大連嶺すら、雲の紗を隔てて、僅かに其の彷彿を認むるのみ。一行、馬を下り、樹枝を焚いて暖を取り、待つこと一時。天已に明けて、雪愈〻甚だし。望を失うて歸途につき、更に、明朝、再訪せんことを期す。

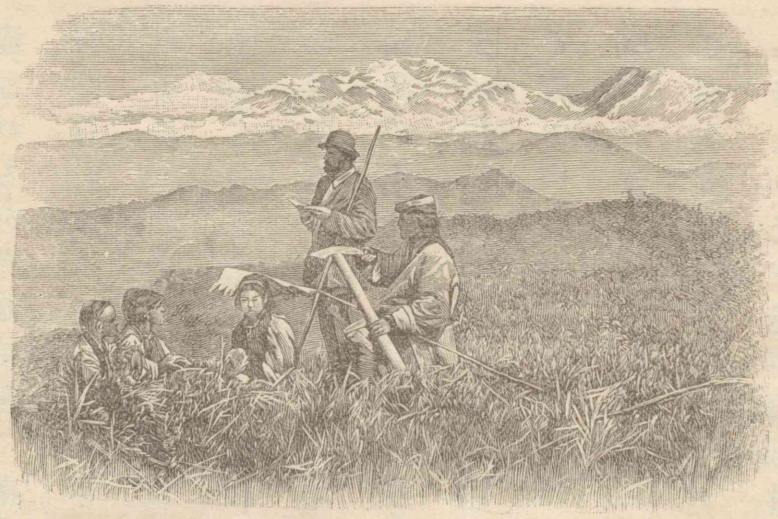
二十七日午前二時、徒歩、雪を蹈んで發す。昨日の騎行の危きに懲りしなり。四時半、タイガーヒルに達す。此の地、近きは二三十哩、遠きは百哩、四方、唯〻、大山脈の限りなく

當面
正面

連なれる・を見るのみ。東南の一角のみ、やゝ低くして打ち開けたり。

此の一大パノラマの中に收めらるゝ連嶺、その一萬呎以上のもの二十五、二萬呎以上のもの十・にして、エベレストは西南方にあり、キンチンジャンガは北にあり。千山・萬岳、此の兩大峰の中間・及び・前後・を點綴す。

天將に曙ならんとす。白雲徐々に山脚に收まり、連山悉く天を摩する一大黑塊たり。忽ち見る、當面のキンチンジャンガ、其の絶巓紫色に變じ、一道の紫光吾人の眼を眩せんとするを。蓋し、ベンガル大平原の地平線に出でたる旭光の、先づ其の頂を照らせる・なり。此の時、山は其の



キンチンヂャンガ峰

上部紫色に、中間は黑塊、下部は白雲の大海・なり。暫くにして、上部の紫は淡紅に、腰部の黑塊は紫に・なり、又、暫くにして、淡紅は琥珀・又は、黃金色・となり、紫色は淡紅に變じ、遂に、全山紅色を帶びたる銀世界となる。一秒、又、一秒、一分、又、一分、日愈出でて、變化愈甚だしく、距離の遠近に從ひ、峰より

峰に、山脈より山脈に、其の變化傳はり行きて、赤きもの・紫なるもの・金の如きもの・銀の如きもの、一時に眼界に映じ來たる。　連嶺悉く旭光に浴せる時、猶ほ背後に一大黑峰の、屹然として立てる・を見る。　蓋し、これ百七哩の距離を有せるエベレスト峰の、猶ほ太陽を迎へざるなり。　待つこと數分時、紫金の光輝數條、エベレスト峰の頂より、爛として群山を照らす。　此の時、連峰悉く紅色となりて、獨りエベレストの紫なるを見るのみ。

あゝ、壯嚴か、雄麗か。　此の時、此の際、人はただ恍然として一種異樣の感に打たれ、其の景・其の情・共に、言慮の外にあり、到底、筆舌の形容を許さざるところなり。　恐らくは、千

屹然
巍然

恍然
恍惚

古の大詩人が畢生の心血を注ぐとも、此の宇宙無比の大觀に對しては、其の萬分の一をも描出し難からん。

恍惚として立つこと一時餘。予れと同じく、此の景に對して、只、時々嘆聲を漏らし居たる男女八名の英人は、此の絶大なる壯觀に接したる喜に堪へず、タイガーヒルの頂上にして舞蹈を始めぬ。(世界探檢に據る)

○演習

(一) 左の文を漢字交り文に改めよ。

てん　まさに　あけぼの　なら　ん　とす。　はくうん　じょじょに　さんきゃく　に　をさまり　れんざん　ことごとく　てんを　まする　いちだいこくくゃい　たり。　たちまち　みる　たうめん　の　やま、　その　ぜってん　ししょく　に　へんじ、　いちぢう　の　しくゃう　ごじん　の　め　を　げんせん　と　する　を。

(二) 左の語句を解釋せよ。

亡國の恨を知らず顏

世界の祕密藏

山勢突兀として天を支ふる壁の如し。

下弦の月密雲に隱る。

太古の森林に反響す。

(三) 本文の中より形容の面白き文句を抄出せよ。

(四) 本文の要點を摘みて短き文を作れ

一九　狐塚

主人「このあたりの者でござる。某、山田を數多持ってござる。當年は、殊の外好う出來てござる。さりながら、此

の頃は、鹿・猿・貉・が出て、田を荒らします。太郎冠者を喚び出だし、山田の番に遣らう、と存ずる。やい〳〵、太郎冠者、あるか。

太郎冠者「はァ。御前に居ります。

主「汝を喚び出だすこと別の事でない。當年は、身共の山田が殊の外好う出來た。それにつき、このごろは、鹿・猿・が田を荒らす程に、汝は、今夜、山田へいて、鳥・獸・も來たらば、逐うて、番をせい。

殊の外
格別
別して
わけて

太「畏って御ざる。私一人でござるか。

主「いや、後程は、次郎冠者も、見舞に遣らう・程に、先づ行け。

太「心得ました。

主「さりながら、このうちは、狐塚の狐が出て、化かす、と云ふ・程に、化かされぬやうにして、番をせい。

こはい
おそろしい

太「それはこはいことでござる。最早、參ります。

主「明日、早々、歸れ。

太「はあ。

主「えい。

太「はあ。扨も〳〵、迷惑なこと言ひ附けられた、夜書、使はるゝと云ふは氣の毒なことぢや。參る程に、これぢゃ。先づ、これに居て、番を致さう。

主「太郎冠者を山田へ、番に遣はしてござる。定めて、淋しうして居るでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさう、と

存ずる。やい〳〵、次郎冠者、あるか。

次「これに居ります。

主「汝は、大儀ながら、山田へ行て、太郎冠者が伽をしてやれ。

次「畏つてござる。

主「小筒も、ちと持て行け。

次「心得ました。これは、扨、迷惑なれども、參らずばなるまい。主命ぢや。是非に及ばぬ。是れは暗うて、何處やら知れることで無い。呼ばはつて見よう。ほうい〳〵、太郎冠者、やあい。何處に居るぞ。

太「さればこそ、狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。ようにせた。おのれ、化かさるゝことでは無いぞ。先づ眉毛を濡らさう。

大儀苦勞

是非に及ばぬ止むを得ぬ餘儀ない

次「ほうい〳〵。

太「ほうい〳〵。此處に居るわ。

次「何處に居るぞ。

太「こゝに居るわ。やあ、次郎冠者か。

次「なか〳〵。賴うだ人がいひつけられて、伽に來たわ。

太「ようこそおりやつたれ。扨も扨も、よう化けた。そのまゝの次郎冠者〳〵。捕らへて、縛つてやらう。やい、次郎冠者。最前、むかふの山から、大きな鹿が出た。を、身共が逐うたれば、此方の山へ、くわら〳〵逃げたわ。

次「それは出かした。

どっこへ
どっこら

心もとなうござる
不安心でござる
きがかりでござる

太「どっこへ、やることでは無いぞ。

次「是れは、何とするぞ。

太「何とするとは。狐め。化さるゝことでは無いぞ。

次「おれは次郎冠者、おれは次郎冠者。

太「何の次郎冠者。おのれ、縛って、此の柱に括って置いて。狐殿、よい姿の。おのれ、今に皮を剝いでくれうぞ。

主「太郎冠者・次郎冠者・を山田へ遣はしてござる。心もとなうござる。見に參らうと存ずる。ほういく。太郎冠者やあい。次郎冠者やあい。ほういく。

太「是れは如何な事。また狐が出をつた。あれは賴うだ人の聲ぢや。これも捕らへてやらう。ほういく。

みどもぢや
おれぢや
このはうぢや

主「ほういく。何處にゐるぞ。

太「此處に居ます。

主「やあ、これに居るか。淋しからうと思うて、見舞に來た。次郎冠者を先へおこしたが、

太「なかく。あれに居ます。これは如何な事。これもようばけた。そのまゝ賴うだ人ぢや。縛ってくれう。かつきめ。おのれ、騙さるゝことでは無いぞ。

主「これは何とするぞ。身共ぢや。

太「己れもよう化けた。先づ、縛って、此の大木に括り附けて置いて、致し樣が有る。狐は、松葉で燻べると、いやがる、と云ふ。燻べてやらう。さあく、尾を出せ。鳴けく。

主「おのれ、太郎冠者め。主を此の様にして。罰あたりめ。

太「何を、狐殿、云はるゝ。さらば、次郎冠者狐も燻べてやらう。さあ〳〵、鳴け〳〵。こん〳〵と云へ。

次「これは何とする、何とする。

太「ありや〳〵。厭がるわ〳〵。おのれ、二疋ながら、鎌を取つて來て、皮を剝いでくれうぞ。鎌を取つて來るぞ。

主「扨も〳〵、氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。

次「左樣でござる。こなたは賴うだ御方か。

主「なか〳〵。汝も、縛り居つたか。

次「いかにも、縛られました。

そち　そのはう　そなた

主「何と。鎌を取つて來る、殺さう、と云ひ居つたが。何と、そちが繩は解かれぬか。

次「されば、どうやら繩がほどけさうにござる。解けますぞ、解けますぞ。さあ、解きました。どれ〳〵。こなたも解きませう。扨も〳〵、憎い奴でござる。何としたものでござらう。

主「いや〳〵。この體では、側へ寄るまい。程に、元の樣にして居て、これへ來たらば、捕らへて、彼奴を搖（ユリ）にあげう。

次「一段とようござらう。

主「さあ、これへ寄つて、元の樣にして居よ。

次「心得ました。

一段　一層　一入

太「狐めは二疋ながら居るか、知らぬ。この鎌で打ち殺してくれう。さあ、今、打ち殺すぞ、打ち殺す〻。

主「そりゃ、次郎冠者。

次「心得ました。

主「おのれは憎い奴の。次郎冠者、足を持て。

次「心得ました。

主「さあ、ゆりに上げ、ゆりに上げ。

太「これは、何と、狐共、するぞ。

主「狐とは。まだ。おのれめは憎い奴の。縛り居ったがよいか。これがよいか。

太「扨は賴うだ人。次郎冠者か。宥させられ。眞平御宥

され、御宥され。

二人「何處へうせる。やるまいぞ〳〵〳〵。（狂言記）

○演習

(一) 本文の中より、今日の口語にもあらず、普通の文語にもあらぬ語句を拾ひあげよ、

(二) 適意の部分を今の口語に改めよ。

(三) 次の文句を今日の普通文に改めよ。

これもようばけた。そのまゝ、賴うだ人ぢゃ。縛ってくれうぞ。

これは何とするぞ。身共ぢゃ。

何としたものでござらう。

(四) 本文の說話を凡そ十行ほどの文に縮約せよ。

二〇　熊王の發心

隱士松翁

長官―頭　次官―助　判官―允　主典―屬

大夫判官（ジョウ）赤松光範が、津の國のかためなりけるとき、左馬頭正儀に度々はかられける・を口をしく思ひこめて、過ごし侍りける・に、去ぬる・住吉の戰に、討たれて失せし・宇野六郎といひしが子に、熊王といひける・が、まだをさなきとき、光範にいひけるは、「正儀は、我が爲にも、親の敵にて候へば、いかにもして、うち侍らん。河内へこえて正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心をゆるし申さぬことのあるべき。たとひ、心をゆるすことのはべらずとも、七とせ・八とせ・程も仕へ候はば、そのうちには、うちぬべきたよりのいかでなからん。御暇をこそ賜はらめ。」と、涙を流せば、光範もいとあはれと思ひながら、「幼なければ、敵の國へ

賜はらめ　賜はめ

やらんも心元なし。又は、命にかはりて討たれし者の子なれば、かたみとも思ふべけれ・ば、」と、強ひてとどめ給ひけれ・ども、「少しおとなしくなりなば、よも近づけ給はじ。」をさなくありなんとき、參りてこそ、」と、しきりに望みけれ・ば、力及び給はで、常に身をはなち給はざりし刀を賜ひて、「是れにて本意とげよ。」とて、阿部野まで、人あまた添へてやらせける・に、それよりは、我れにひとしき童一人を具して、赤坂の城に行き・て、そのほとりにたゝずみてありける・を、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人にかおはすらん。」と尋ねられて、「われは大夫判官光範の侍にて、宇野六郎といひける・者の小子に、熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍

力及ばず　せんかたなし　やむことを得ず

さすらふ
さまよふ
流離す

しらす
しろす
しろしめす

る六郎は、去ぬる時、住吉の戰にうたれて候ふを、一門にて侍る備後守が我れを追ひうちて、領地を奪ひ候へ・ども、光範と心を合はせ候へば、せん方なくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧・法師・にもなり、父の跡を弔ひ候は・んが爲にさすらへ侍り。」といひける・を、あはれときゝて、まづ、我が方に伴なひて、さまざまいたはりて、後に、正儀にありつる事を語りて、「をさなくは候へど、心のさか〳〵しくて、」など申す。に、あはれがり給ひて、召し寄せ給へり。

もとより情ある人なりければ、熊王もおもひつきて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五程になりければ、「河内の國にてすこしなる處をしらせん。」といひ

けれども、「いかで、恥ある一矢をもいさぶらひてこそ、」とて、辭しにけり。

あくる年の春、父が七めぐりにあたりける・に、思ひつけて、「こよひ、正儀をうちて、父の手向にもし、光範の心をも安め奉ら・ん。」と思ひ立ちてありけるに、その日、御前に召して、「けふは吉日にてあるなれば、元服せよかし。」とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より賜はせける鎧を賜ひけれ・ば、涙を袖にかけて、喜ぶ。夜に入るまで、正儀の御前に在りける・が、また、ふと、思ひ出でて、「討ち奉らんならば、今宵こそ、」と思ひて、膝をおし直して、正儀に目をかくれ・ば、年頃の情深かりしこと・今日の元服の

ありつる心のうちを申して心に思ひまうけしことども皆うちあかして

こと・など思ひつづけて、「いかで情なくうち奉らん。」と思ひ返して、心を鎭むれば、「父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならね・ば、」と思ひ定めけれ・ども、何心もなくわたらせ給ふ有樣を見けれ・ば、御いたはしくて、堪へかねける・にや、廣緣に出でて、聲をあげて泣き叫ぶ・を、人々も正儀もおぼつかなく思ひたまうて、障子を開き見たまへる・に、伏し沈めるさまの、ただには見えずあり・ければ、「いかに」、と問はせ給ひけれ・ば、ありつる心のうちを申して、「とにかくに、君のため・先君のため・父のため・に、みづから死なんより外は候はず。」とて刀を取り直せ・ば、ありつる人どもみな涙にくれてあり・ながら、「いかでさはあらん。」と取り附きてはたらかせねば、力及ばで、その刀にて髻押し切り、往生院にて形を替へ、君より賜はせたる名なればとて、正寛法師とぞいひける。

ありもやせん
ありもぞする

寺の傍に草の庵を結びて、「もしも心のかはることのありもやせ・ん。」とて、往生院の門の外へは出でず・して行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありし有樣をくはしく書き添へて、返しけり、とかや。いとあはれなりける事にこそ。（吉野拾遺）

○演習

（一）熊王の心事を批評せよ。

（二）「…しけり」と「…しけりとかや」と「…けりとぞ」との意義の異同を問ふ。

（三）本文につきて、左の文句の下にいひ殘したる語を補ひみよ。

「をきなくありなんとき」參りてこそ、」
「をさなくは候へど、心のさか〳〵しくて、」
「いかで恥ある一矢をもいさぶらひてこそ、」
「討ち奉らんならば今宵こそ、」

㊃　本文の初めより「あはれがりて召し寄せ給へり」まで及び「夜に入るまで」より「正寛法師とぞいひける」までを成るべく簡單なる形の文に分かて。

唱道主張

二一　道德と法律その一

梅　謙次郎

當今、社會の風敎の上よりして、法律に對して、二樣の誤りたる觀念を抱く者あり。其の一は、儒敎を學びたる人などの唱道する所にして、「近來の人は一般に法律を先にして、道德を後にする弊風あり。法律上の權利・義務などを

服從屈從面從

主張するは、人情を刻薄ならしむる者なるを以つて、道德上より觀れば、これらを主張せざるを善しとす。これらは、寧ろ、度外に置きて、單に道德上よりのみ社會を觀察すべし。」と論ずる者なり。この說は或る意味に於いて、誤れり、といふべし。勿論、人は倫理・道德を主として、行爲を正しうせざるべからず、といへども、苟くも社會を組織して生活する以上は、其の社會維持のために必要ありて、制定せられたる法律を度外視することあるべからず。其の法律に服從するも、亦、道德の一ならずんばあらず。

其の二は、上說と全く反對にして、「苟くも法律に於いて許す事は、すべてこれを行ひて可なり。猶ほ一歩を進めて

標準
準繩

は、法律に於いて禁ぜざる限は、如何なる事にても、これを行ひて、可なり」と說き、又は、「法律上有する所の權利は、飽くまでこれを主張し、他人が己れに對する義務は、飽くまでもこれを他人に要求するを以つて、人道なり」と說く者なり。これらの說は、また、誤れり、といはざるを得ず。法律は決して各人の行爲の標準を示せるものに非ず。唯、社會を維持するために必要なる事項の範圍を示すに過ぎず。社會を維持するには、かく〳〵の範圍內の事は、干涉しても、是非禁ぜざるべからず、かく〳〵の範圍內の事は、命令しても、是非行はしめざるべからず、となし、其の條項を規定したる者、これ、卽ち、法律なり。個人間の關係に於いて、若し雙方が互にその利益を主張して爭ふ場合には、何れに如何なる權利を認め、何れに如何なる義務を認むれば、公平なるか、を規定したる者、これ、卽ち、法律なり。されば、法律に觸れざる者は、唯、法律上の罪人にあらず、といふべきのみ、決して、完全なる人なり、とはいふべからず。」惟ふに、國法の禁ずる所は、決してこれを犯すことあるべからず。國法の義務なりと定むる所は、飽くまでもこれを盡くさざるべからず。是れ、道德上より視るも、當然の事なりとす。然れども、他人に向かひて、己れに對して法律上の義務を悉く盡くさしめんとする者は、道德上より視れば、寧ろ人の爲すべきことにあらず。他人の不正なる

なり
なりとす

侵害
迫害

安穩
安寧
安全

行爲に因りて、自己の權利を著しく侵害せられたる場合に、社會的生存の必要より、己むを得ず、理非を法廷に爭ふ。は、道德上にても、正當の事なり。法律上にても、亦、然り。されど、法律の許すかぎり、悉く法廷に訴へて權利を主張せんとする。が如きは、法律上にては、何等の非難すべき點なけれども、人類が成るべく、安穩に、平和に、生活する。を善しとする所の道德主義に反するを以って、道德上よりこれを非難せざるべからず。

若し、世上の人が悉く善人にして、且つ、事理に明かなら。ば、法律の必要あることなく、單に道德のみを以って支配して、足らん。然れども、世には惡人多く、知識の不完全なる

理非曲直
利害得失

順良
從順

者も、亦、少なからず。こゝを以って、若し彼れらの間に紛爭の生ずることあらんには、その理非曲直は裁判所に於いて、これを裁判せざるべからず。その標準を定めたるものが、普通の法律、卽ち、私法なり。公法も、その成立はこれと相同じ。されば、若し治者が悉く賢明にして、被治者が悉く順良ならん。には、或は公法の必要はなかるべし。然れども、治者は必ずしも皆賢明ならず、被治者も、また、必ずしも順良ならず。こゝを以って、治者が被治者に對し、被治者が治者に對し。て、求め得る範圍を明かにせざるべからず。此の範圍を明かにしたるもの、是れ、卽ち、公法なり。

二二　道德と法律その二

梅謙次郎

爰に、二三の例を擧げて、説明せん。に、民法に於いては、親が子を養ひ、子が親を養ふ・義務を認む。或は、かくの如き事は、法律にて定めざるを可しとする者あり。然れども、若し不慈の父母ありて、相當の資産を有しながら、その子を養育せざる・場合に於いて、單にこれを道德にのみ委したりとせんに、その父母にして道德を重んぜざる時は、其の子は終に飢餓に陷らざるを得ず。此の場合に於いて、其の子をして飢餓を免れしめんとせば、國・或は、地方團體・に於いてこれを收養するか、或は、これを慈善家の救助に任

飢餓に陷る
凍餒に困しむ

救助
救護
救濟

するか・せざるべからざらん。又、子が親を養ふべきは、倫理上當然の事なり、といへども、若し不孝の子ありて、相當の資産を有しながら、父母の飢餓するを顧みず、道德を以つて責むれども應ぜざる・ときは、其の父母は、國・地方團體・或は、慈善家・の救助を受くるにあらざれば、終に餓死すべし。されど、相當の資産を有しながら、其の親・又は、子・を養育せずして、却って、これを國・又は、其の他の公共團體・若しくは、慈善家・の養育に委せんとする・が如きは、不當なり、といはざるを得ず。然れども、此くの如き場合に於いて、子が父を訴へ、又は、父が子を訴ふる・が如きは、誠に望ましからぬことなり。父は餓死すとも、決して子を訴ふること

裁可　許可　允可　允許

なく、子は餓死すとも、決して父を訴ふるなからんことこそ望ましけれ。是れ、實に、道德上の人情なり。然れども、若し法廷に訴へてその權利を主張する者あるときは、法律は相當の資產を有する所の親に、子を養ふ義務を認め、子に親を養ふ義務を認めざるを得ざるなり。

又、公法に於ける德義と法律との關係を、實例を擧げて、論ぜんに、今日の憲法に於いては、一の法律案が貴衆兩院を通過し、御裁可を得て公布すれば卽ち法律となる。されど、是れ唯、法律上の事のみにして、政治の局に當たる者は、務めて、完全なる法律を作り、有害不要なる法律を作らざることを勉むべきなり。憲法が許せばとて、濫に法律案

責任　職責　職務　職掌

を出だし、十分にその利害得失を調査せずしてこれを議決し、法律としてこれを發布することあらんには、法律上よりは少しも間然する所なしといへども、政治家の德義としては其の無責任を責めざるを得ず。

又、公法は、人民の爲に、行政官の處分に對して、一定の範圍內に於いてのみ、訴訟の道を開けり。故に、法律の認むる場合の外、人民は行政官の處分に對して訴訟を起こすを得ざれば、行政官たるものは、人民に於いて訴ふる道無き限は、如何なる處分を爲すとも可なるか、といふに、決して然らず。法律はこれを禁ぜざれども、行政官の德義として顧みざるべからざることあり。人民に訴訟の道なき

處分
處置

處に於いては、行政官の德義上の責任は、寧ろ益〻重さを加ふるなり。かゝる場合に於いては、行政官たる者は、國家全體の利益を謀ると共に、各人の利益を謀るべし。是れ、實に行政官の德義なり。若し法律の許す限は、如何なる處分をなすとも、可なり、とするに至らば、官民間の平和こゝに破れて、國家の維持は困難なるに至るべし。

これを要するに、法律の禁ずる所は、道德も、亦、これを禁ず。人類の幸福のために社會を組成し、これを維持するために、主權者が、其の必要を認めて制定したる法律は、各人、皆これに服從せざるべからず。其の法律に對する各人の批評的意見の如何に拘らず、其の法律として存する限は、

紊亂
紛亂
錯亂

瑣細
紛亂
錯亂

これに服從するは、國民の義務なり。若し、人々これに異議を挾み、服從せざるに至らば、社會の秩序は紊亂して、國家は維持するを得ざらん。他人が法律上の權利を主張するに方りては、たとひ道德上よりは、これを不正當なりと考ふとも、その權利には服從せざるべからず。これ前と同じ理にして、國法に服從する精神より來たるなり。されど、自己の行爲の標準を法律に取り、法律の許す限は、如何に瑣細なることにても、飽くまでその權利を主張し、法律の禁ぜざる限は、如何なる事を行ひても可なりとなし、道德の如きは顧みるに足らずとなすに至りては、大いなる誤なり。國民の多數がかくの如く誤りたる思想を

抱くに至らば、その國の繁榮は永く維持するを得ざるべし。（中等國文讀本）

○演習

(一) 左の語の意義の異同を說明せよ。

（法律　行政　社會　權利　行政官　無責任　干涉
（憲法　政治　世界　義務　主權者　無能力　關係

(二) 左の文の○符の處を塡字せよ。

學校に○○あるが如く國家には○○なかるべからず。
法律案は帝國議會に於いて○○し、天皇の○○を經て之れを○○す。

(三) 「範圍內」「安寧秩序」を用ひて各、一の短文を作れ。

(四) 左の文句を解釋せよ。

法律の備はらざる所は金言これを補ふ。
隱れたるより見はるゝはなく、微かなるより顯かなるはなし。

みづからあやぶむ
みづから侮る

故に君子は其の獨を愼む。

(五) 本文の主意を數言に約めて言へ。

二三　人臣の道

源親房

凡そ、王土に生まれて、忠を致し、命を捨つるは人臣の道なり。必ず、これを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、其の跡をあはれびて、賞せらるゝは君の御政なり。下としてきほひあらそひ申すべきにはあらぬにや。況して、させる功なくして、過分の望をいたすこと、みづからあやぶむるはしなれど、前車の轍を見ることはまことに有り難き習なりけんかし。

召し具す　召集す　徴集す　徴發す

中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕るこゝろあり、果たして、身を亡ぼし、家を失ふ。ためしあれば、戒めらるゝも理りなり。

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の、源平の家に屬する事をとどむべし、といふ制符、度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は、宣旨を賜はりて、諸國の兵を召し具しける。に、近代となりて、やがてかたらはるゝやから多くなりしによりて、此の制符は下されき。果たして、今までの亂世の基なれば、云ひがひなき事になりにけり。此の頃よりのことわざには、「一度軍にかけあひ、或は、家の子・郎從、節に死ぬる類もあれ・ば、わが功におきては、日

あらじなれど　あらざるべけれど　あるまじけれど

堅き氷は霜を履むよりいたる　霜を履んで堅氷いたる

本國を賜へ。もしは、半國を賜はりても足るべからず」などと申すめり。まことに、さまで思ふことはあらじ・なれど、やがて、これより、亂るゝはしともなり、又、朝威の輕々しさも推し測らるゝものなり。

「言語は君子の樞機なり」といへり。あからさまにも、君をないがしろにし、人に驕る・事はあるべからぬことにこそ。さきにも記せるごとく、堅き氷は霜を履むよりいたる・習なれば、亂臣・賊子・といふものは、そのはじめ、心・言葉・を慎まざるより出で來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變はるにもあらず、草木の色の改まるにもあらじ。人の心の惡しくなり行くを、末世とはいへるにや。昔、許

思ひやることそあさましけれ
思ひやることそうたてけれ

じまじざらん

由と云ふ人は、帝堯の、國を傳へんとありし・を聞きて、潁川に耳を洗ひき。巣父は是れを聞きて、この水をだにきたながりて、渡らざりき。其の人、五臓・六腑・の變はれるにはあらじ、能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

なほ行く末の人の心、思ひやることそ、あさましけれ。大方、おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨をのこすべき事をばなどか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて、限なき人にわかたせ給はん事は、推しても測り奉るべし。一國づつを望まば、六十六人にてふさがりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも、千萬の人は喜ばじ。況や、日本の半ばを志し、みながら望まば、帝王は何處をしらせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出だし、面にも恥づる色のなき・を、謀叛のはじめとはいふべきなり。

將門が比叡山に登りて、大内を遠見して、謀叛を思ひ企てける・も、かゝる類にやありけん。昔は、人の心正しくて、將門に・見も懲り・聞きも懲り・けんを、今は、人々の心かくのみなりにたれ・ば、此の世愈、衰へぬるにや。（神皇正統記）

○演習

(一) 左の句の有する種々の意義を說明せよ。

あからさまに　あるべからぬこと

(二) 左の文を解釋せよ。

普天の下王土にあらざるはなく、率土の濱も王臣にあらざるは

なし。

心、内に動いて、言、外に發す。言、煩噪ならざれば、心亦安靜なり。況や、こは樞機にして、吉凶榮辱もだゞ言語の招くところなるを、や。戒めざるべからず。

(三) 左の語につきて、品詞を識別せよ。

近代となりて、やがて、かたらはるゝやから多くなりしによりて、

此の制符は下されき。

(四) 此の文を讀んで如何なる感想を起こしたるか。

行宮　行在所　行營

二四　吉野の霧

源　親房

同じき十二月に、しのびて都を出でましまして、河内の國に正成といひしが一族を召し具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を作りてわたらせたまひ、もとのごとく在位の儀にてぞましましける。内侍所も遷らせたまひ、神璽も御身に從へ給ひ、けり。誠に、奇特の事にこそありしか。

奇特　稀有

吉野のみゆきにさきだちて、義兵をおこす輩もありき。臨幸の後には、國々にも、御志あるたぐひ、あまた、聞こえしかど、次の年も暮れぬ。

又のとし戊寅の春の二月、鎭守府將軍顯家卿、又、親王をさきだて申し、かさねて、打ち上りぬ。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢・伊賀・を經て、大和に入り、奈良の京になん著きにける。それより、處々の合戰あまたゝび、互に勝負ありしに、同じき五月、和泉の國にての戰に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝに極まりにき。苔の下にも埋もれぬものと

苔の下　草葉の陰

しのびて
密かに

ては、唯、徒らに名をのみぞ留めし。心うき世にもありしかな。官軍、なほ、心を勵まして、男山に陣をとりて、しばらく合戰ありしか・ど、朝敵、しのびて、社壇を燒き拂ひしより、事成らずして、引き退きぬ。北國にありし義貞も、たびたび召されしかど、下りあへず、させる事なくて、空しくさへなりぬ、と聞こえしか・ば、いふばかりなし。

さてしもやむべきならず、とて、陸奥の皇子、また、東へむかはしめ給ふべき定あり。左少將顯信朝臣、中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸奥介・鎭守將軍・を兼ねしめ・て、遣はされぬ。東國の官軍悉く彼れの節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲君に立たせ給ふべき旨、申し聞かせ給ひて、「道の程もかたじけなかるべし。國にては、あらはさせ給へ、」となん申されし。異母の御兄も、あまた、ましまし き。同母の御兄も、前東宮恒良親王・成良親王・ましましに、かく定まり給ひぬる・も、天命なれ・ば、かたじけなし。

纜を解く
解纜
出帆
拔錨

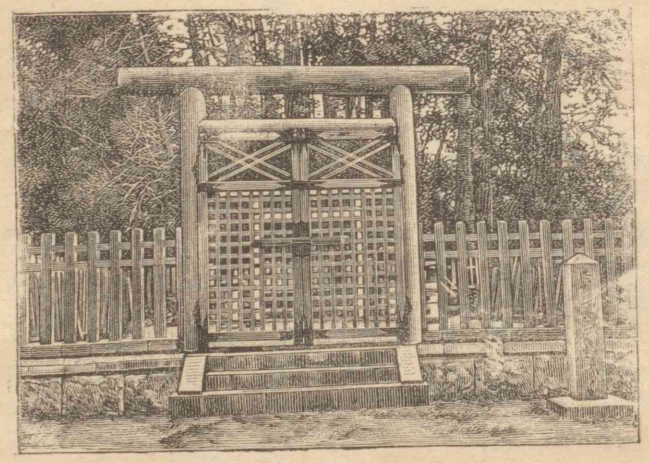
七月の末つかた、伊勢に越えさせたまひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、纜を解かれし・に、十日あまりのことにや、上總の地近くより、空の景色おどろ〳〵しく、海上あらく・なりしかば、また、伊豆の崎といふ方へ漂はれしに、いとど波風おびただしくなりて、數多の船行き方知らずなりける・に、皇子の船は、さはりなく、伊勢の海に著かさせ給ひぬ。顯信朝臣は本より御船に侍ひ

さはりなし
つゝがなし

下向赴任

けり。同じ風のまぎれに、東をさして、常陸の國なる内の海に著きたる船ありき。方々に漂ひし中に、此の二つの船、同じ風にて、東西に吹きわけられぬ。末の世には、珍かなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神のとどめ申させたまひけるなるべし。後に、吉野に入らせましまして、御目の前にて天位を繼がせ給ひしかば、いとど思ひ合はせられて、貴くもありしかな。又、常陸はもとより心ざす方なれば、御心ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州・野州・の守も、次の年の春、重ねて、下向して、各國に著きにき。」

さても、舊都には、戊寅の年の冬、改元して曆應とぞいひける。吉野の宮には、本の延元の號なれば、國々もおもひおもひの年號なりき。唐土には、かゝる例多けれ・ども、此の國には、例なし。されど、四年にもなりぬるにや。大日本島根は本よりの皇都なり。内侍所・神璽・も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。



後醍醐天皇御陵

さても、八月の十日あまり六日にや、秋霧にをかされさせ給ひて、かくれましましぬ、と

さへ
も
までも
だに
すら

ぞ聞こえし。寝るが中なる夢の世、今に初めぬ習とはしりながら、かず〳〵目の前なる心ちして、老の涙もせきあへね・ば、筆の跡さへとどこほりぬ。（神皇正統記）

○演習

(一) 係結の法則を述べ、且つ、本文につきてこれを指摘せよ。

(二) 左の施線のところに漢字を充てよ。

天命なればかたじけなし。

御船のよそほひす。

秋霧にをかされさせ給ひてかくれましましぬ。

筆の跡さへとどこほりぬ。

(三) 左の二文を結合して一文と爲せ。

道のほどもかたじけなかるべし。　國にてはあらはさせ給へ。

(四) 左の口語を文語に改めよ

そんなことをしてもおかれないからといふので、親しい者がみんな打ち寄って、あとしまつをつけた。

(五) 左の文を平敍體に改めよ。

內侍所・神璽・も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき

擬人法

寥廓たり
寥寥たり
蕭條たり

二五　百花譜

大町桂月

郊原一路、滿目すべて薄なり。夕陽沈まんとして、雲色かなしみ、西風冷かにして、酸たる鳥聲、秋の恨を語る。馬の嘶く聲まづ聞こえ、小歌聞こえ・て、近づく・を見れば、若き農夫馬背にあり。手綱は、鞍にあづけたる・まゝにて、馬の自ら歩むは、熟せる路にや。鴉飛びつくして、四面寥廓たり。ふと顧れば、招く尾花の末に、一團の大月明かなり。雀の聲滑かなる冬の日和、日かげ暖かに圓窓を射て、火鉢

の火も消えかゝれり。室淨うして、塵なし。床の間の俗氣なき書幅の下、水仙三つ四つ、花を帶びたり。老人二人、靜かに、局に對して、子を下す聲、時に、丁々として響く。

人籟なし
天籟あり

桃花數株、茅屋をかこみて、鷄聲午なり。桔槔動かずして、一犬門外に眠り、屋内よりは、ひなびたる歌の聲、機杼の聲と共に、洩れ來たる。

一泓の池水、半ば、これ蓮花。白や紅や影を水におとして、水に花あり。健鯉時に躍りて、波文岸に及ぶ。水樹深く鎖して、人籟なし。曉烟垂柳を罩めて、日未だ昇らず。流るとしもなき里川、底は泥なれども、水は澄みたり。こなたは、小徑行人なく、かなたは、椿自ら垣になりて、多く花をつけたり。流鶯時に一聲。思ひがけずも、大輪の花ぽとりと水に落ちて、水暫くは紋をなす。

風にもだゆ
風になやむ

村はづれに岐路ありて、問はんとするに、人なし。馬頭觀世音の石像、頑として、物いはず。側に生ひ出でたる幾莖の女郎花なよ〳〵として、風にもだゆ。

侶伴なくて、詩を思ひつゝ、たどる山路、到る處、櫻花多し。春風一陣、空に晴雪をちらし、地に綾のむしろを敷く。

池畔の掛茶屋、少女、欄により、手をうちて、鯉を呼ぶ。稚兒立ちて、麩を投ぐ。棚上の藤花累々として、さがりて、人の頭に及ばんとす。

麥浪に連なる一面の菜花。菜花や黄、麥浪や綠。滿地み

あへぎあへぎ上る　一歩一喘

な色あり。行人絶えて、遊絲のどかにかゝり、一雙の胡蝶追逐し去って、行く處を知らず。

夏の日あつく、山路けはしく、あへぎ〳〵上るに、渴を催して、堪へ難き・に、水音聞こえて、いとうれしく、荆莽を排し・て、之れに就けば、急湍清玉をほとばしらす。一掬、二掬、三掬、漸く蘇生の思をなして、ふと目をそゝげば、苔滑かなる巖の上に、百合の花危げに立てり。折らんと欲して、折るに忍びず、たちわかれんとすれば、滋き水のしぶきに、花涙を含むが如し。

白鷺の小首かたむけて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて、柳影長き・堤の上、ゆきかふ人なし。巨蟹はひ出で

て、泡を吐きつゝ、螯を擧げて空を挾む。

馬にはません料とにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら刈りたる・草の一束、背にのせて歸りゆく・田舍少女、知りてか、知らずてか、その草の中に、桔梗一枝まじれり。

鸚鵡語りつくして、日暮れんとす。人を待てども、到らず。

蕭々たる細雨、庭の秋海棠にそゝぐ。

はるかに隔たれる處よりおこせたる・水莖の跡もうるはしき・手紙、ひらきゆけば、紙のまさに盡きんとする處、菫の花二ひらはさまれたり。色未だあせず。(春草秋草)

○演習

(一) 本文につきて擬人法の句を指摘し、且つ、これを尋常の語法に言ひ

かへよ。

(三) 本文の起筆に倣ひて、左の施線の處を塡補せよ。

秋天一碧、滿目□。旭日昇らんとして紫雲□、西風徐ろに吹いて群雀□。

(三) 「秋に聲あり」「花語らんと欲す」を用ひて各、短文を作れ。

(四) 文中、面白く感じたる語句を抄錄せよ。

二六　崋山人ガ百花畫卷ニ題ス　林鶴梁

芍藥紅矣。牡丹紫也。春色之艶可ㇾ觀也。菊花黃也。木犀白也。秋容之美

芍藥ハ紅ナリ。牡丹ハ紫ナリ。春色ノ艶觀ルベキナリ。菊花ハ黃ナリ。木犀ハ白シ。秋容ノ美賞スベキナリ。然レドモ、春秋ヲ一ニシ、以

造化之工
天然之工
自然之工

庸工
庸人
庸劣

可ㇾ賞也。然欲ㇾ一ニ春秋以同ㇾ觀賞ㇾ雖ニ造化之工ニ所ㇾ不ㇾ能也。今崋山人描ニ水仙乎紫藤之下ニ畫ニ梔子乎白梅之間ニ。其他四時群花寫生無ㇾ遺。是合ニ春秋ニ而一ニ其候ニ也。且其畫法神品一一逼ㇾ眞將ㇾ發ニ芳香ㇾ。是卽活花不ㇾ比ニ庸工之

ッテ觀賞ヲ同ジウセ・ント欲スルハ、造化ノ工ト雖モ、能ハザル所ナリ」。今、崋山人、水仙ヲ紫藤ノ下ニ描キ、梔子ヲ白梅ノ間ニ畫ク。其ノ他ノ・四時ノ・群花、寫生シテ遺スコトナシ。是レ、春秋ヲ合ハセテ、其ノ候ヲ一ニセル・ナリ。且ツ、其ノ畫法神品ニシテ、一々眞ニ逼リ、將ニ香ヲ發タントス。是レ、卽チ、活花ナリ、庸工ノ死花ニ比セズ。然ラバ、則チ、山人ノ畫ハ能ク天工ヲ奪フト謂フベシ。

死花。然則山人之畫可謂能奪天工矣。余性愛花。然郡齋假寓不能多栽。今獲此以爲文房之友眞一適也。

文房書齋

余、性、花ヲ愛ス。然レドモ、郡齋假寓ニシテ、多ク栽ウルコト能ハズ。今、此レヲ獲テ、以ッテ、文房ノ友ト爲ス、眞ニ一適ナリ。（鶴梁文抄）

○演習

(二) 左の詩を假名交り文に改めよ。

掬水月在手　弄花香滿衣
山花開似錦　澗水湛如藍

(三) 芍藥の紅・牡丹の紫、春咲く花のうるはしや

右の句に倣ひて秋の花を敍せよ。

(三) 桃・櫻・萩・桔梗・を用ひて本文の第一段に似たる文を作れ。

二七　古へより今はまされり*　本居宣長

古へよりも後の世のまされること萬の物にも事にも多しそのひとつをいはんに古へは橘をならびなきものにして感でつるを近き世には蜜柑といふものありてこの蜜柑に比ぶれば橘は數にもあらずけおされたり其の外柑子柚九年母橙の類多き中に蜜柑ぞ味ことにすぐれて中にも橘によく似てこよなくまされる物なるこの一つにて推し量るべし或は古へにはなくて今はあるものも多く古へはわろくて今のはよき類多しこれをもておも

けおさる
けぢかし
けどほし
けおとる

あかぬこと
心ゆかぬわざ

へば今より後も亦いかにあらん今にまされる物多く出で來べし今の心にて思へば古へは萬に事足らずあかぬこと多かりけんされど其の世にはさはおぼえずやありけん今より後また物の多くよきが出で來ん世には今をもしか思ふべけれど今の人事たらずとは覺えぬがごとし。（玉かつま）

○演習

(一) 本文より古語を擇びて、それにあたる普通の語句をあてはめよ。

(二) 左の語を反語法に改めよ。

この一つにて推知すべし。

今にまされるもの多く出で來ぬべし。

(三) 左の文句を現在の事をいふ文に改めよ。

されど其の世には去か思はずやありけん。

購ふ
贖ふ
償ふ

二八　洋學開祖諸哲の苦學

大槻文彦

今の洋學教師あり、對譯辭書あり、洋書も價安く購はるゝ。世にだに、外國語は尙ほ學ぶに艱む。されば、日本國中にーa字をも知る者なき世にありて、始めて洋書を讀み出でし人の苦學は、いかばかりなりけん、思ひやるべきなり。」足利氏の世の末より德川氏の世の初にわたりて、凡そ百年ばかりの間に、葡萄牙人、西班牙人、日本に來たりて、專ら切支丹の宗門をひろめたり。然るに、德川幕府は、其の宗門我が國に害あり、とて、兩國の人の、日本に來たる・ことを禁じ、併せて、洋書をも禁じ・たれば、日本國中に、遂に洋字を知る者なきに至りぬ。

後、德川八代の將軍吉宗、天文學に通じ、阿蘭陀國より獻じたる天文書の圖の精微なるを見て、「此の文を讀み得ば、必ず益あらん。」と言はれしに、時に、書物奉行に青木文藏(昆陽と號す)といふ人ありて、かねて、洋文を讀まんの志あり、といふことを、將軍、聞かれて、乃ち文藏をして學ばしむることとはなれり。時に元文四年なり。

精微
精緻
緻密
詳細

其の頃、阿蘭陀人のみは長崎に來たり居ることを許されて、其の頭人甲必丹といふ者、將軍に拜謁として、年々江戸に來たれり。文藏、乃ち、甲必丹に就き、通辯に因りて、少し蘭字を學び、延享元年、又、長崎に行きて、學び、苦心して蘭語の名詞・動詞等四五百語を覺えて、江戸に歸り、其の道を開

拜謁
謁見
會見

かんとせしかど、將軍吉宗薨ぜられて、中止する姿となりぬ。

爰に、中津藩の醫に前野良澤(蘭化と號す)といふ人あり。ある時、知れる人より蘭字を印刷したる紙片を得たり。良澤見て、固より讀み得ざれど、「人の讀む文字ならば、同じき人にして、讀み得ぬことはあらじ。學ばまほし。」と思ひ起こして、彼の青木文藏の、蘭字を知れりといふ事を聞きて、四十七歳にて其の門に入りて、始めて學び、明和七年、長崎に行きて、學び、(安永二年に再び行けり)數部の蘭書を得て、江戸に歸れり。此の時は、洋書の禁は已にゆるびてありき。

解剖
分析
解析

奇遇
奇偶

明和八年に、甲必丹江戸に來たりて、一の原書を賣らん、と云ふ。小濱藩の醫に杉田玄白（鵠齋と號す）といふ人あり。此の事を聞きて、其の書を購へり。是れダーフルアナトミアといふ解剖書なりき。此の年、三月四日、江戸の南千住、小塚原の刑場に、罪人の屍を解剖する事あり。玄白己れが解剖書中の圖と合はせ見んとて、小塚原に至り、前野良澤に出で會ひ、竊かに書物を出だして示しに、良澤も懷中より一書を出だす。見れば、全く同一の書なり。二人奇遇に驚き、やがて、解剖するを見るに、臟腑の位置・形狀、書中の圖と少しも違はずして、從來の漢法醫の圖の、大いに誤れる・を知れり。歸途に、玄白、良澤に向かひて、我れら

講究
研究
研鑽

君に仕へて祿を受く。一朝、君公に病あら・ば、治療せねばならず。然るに、臟腑の位置をも心得ず、とありては、職に堪へず。いかにかして、此の書を讀み分けまほしきものなり。」と云ひしに、良澤「やつがれ、實は、竊かに、獨學して、苦しめり。君に其の志あらば、同志を得たるなり。俱に講究せずや。」と云ふ。玄白驚き喜びて、「さらば、『善はいそげ』といふ諺もあり。明日より始めん。」と約したり。

斯くて、玄白、良澤の家に會して、讀み始め・たるに、讀み難し。因りて、圖の中には1 2 3 4等の符牒あれば、とて、先づ圖より始めたり。初は、冠詞・前置詞・などは、解せられず、唯、名詞・動詞・などを拾ひ讀みて、前後の意を迎へて、讀めり。一

日、フルヘッヘンドと云ふ語出でて、何とも解せられず。良澤が長崎より持ち歸りし辭書やうのものに、「生木を伐れば、其の跡フルヘッヘンドす。掃除して塵溜まれば、フルヘッヘンドす」とあり。是れ「高くなる」と云ふ意なるべし。鼻は顔の中にて高し。因りて、「堆し」と譯して可ならん、と一決して、非常なる功として、喜べり。かゝるありさまにて、毎月五六回會するに、桂川甫周(月池と號す)・中川淳庵・嶺春泰・などいふ六七人の同志者も集まりて、頻に講究せり。

精神ひとたび到らば、何事か成らざらん。斯くて、漸く讀み分けゆく中に、次第に文意も解せらるゝやうになり、一

譯文飜譯

驚歎歎賞

行・若しくは、半枚・讀み解き得れば、玄白卽ち譯文し・て、滿四年の間に十一回草稿を改めて、成りし・もの四卷を、解體新書と題して、出版せり。是れ、日本翻譯書の第一にて、實に、安永三年なり。かゝる苦心の學なるに、僅かに四年にして、業を成したる・は驚歎すべき事ならずや。

然るに、青木文藏は公命を受けて洋書を讀みしなれど、玄白等は然らず。書物は出版せしかど、禁制を犯して洋書を讀みたり、との罪に陷ら・ば、刑せられんも測られず、とて、苦心せしに、幸に、桂川甫周の父は德川將軍の侍醫なりければ、此の人に因りて幕府の老中諸家に獻本せしに、受けられ、尙ほ又、京都の・近衞・九條・等の諸家へも獻本せしに、是

先輩先進

れ、亦、受けられ・て、安意したり、と云ふ。

時に、仙臺藩の醫に大槻玄澤(磐水と號す)といふ者あり。安永七年に、玄白の門に入りて醫學を學び、解體新書を讀みて、深く人身究理の精密なるに服し、原書を學ばんことを請ひ・しに、玄白、短日月には學ぶこと難し、とて、許さず。玄澤、竊かに同塾の先輩に就きて蘭學を受けて、尋常の人の、半年・一年・もして覺ゆべき・を、三四十日にて能くしたりけれ・ば、玄白大いに驚きて、己が見の足らざりしを告げて、其の學を授けたれ・ど、醫業に忙しければとて、玄澤を良澤に託しぬ。

然るに、良澤は閉戸して書見に耽り、人と交通せざる・人なれば、病に託して、深く引見せ・ず。されど、玄澤屈せずして、此の師に就かずば、此の業を成し得まじ、とて、訪問すること數十回に及びけれ・ば、良澤も其の篤志に感じ、後來望みある青年なりと認めて、師弟の契を結び、悉く其の蘊奥を授けたり。

事情實情仔細

玄澤長崎に行きて學ばんの志ありつれど、旅費・學費、心に任せず。福知山藩主朽木隱岐守昌綱(龍橋と號す)古錢を好みて、西洋の銀銅錢に及び、又、西洋の地理をも講究せり。是れらの翻譯に、玄澤も其の家に出入して、助けし・事ありしかば、事情を告げしに、侯、資金若干を與へたり。是に於いて、天明五年に、玄澤長崎に行きて、學びて、明年、江戸に歸

れり。

良澤は隱君子にて、獨り其學を修め、玄白は醫業に專らなり・けれど、玄澤は、大いに蘭學を世に開きて、廣く西洋の學術を導かん・の志ありて、乃ち、蘭學楷梯といふ書二卷を作りて、出版せり。此の書は日本にて洋字を刻版にせし初のものにして、時に天明八年、玄澤二十八歳なりき。然るに、是れより先き、二十餘年前、明和二年に、後藤梨春といふ者阿蘭陀話といふ書を出版し、a b c 二十六字を載せたり・しを、幕府にて絶版せしめし事ありければ、蘭學楷梯に就きても、罪せられんか、と、深く心を痛めし・に、幸に事なきを得たり。

鼓吹宣傳

蘭學楷梯には、蘭字二十六字より子音・母韻・の配合・西洋數字・名詞・動詞・形容詞・など・其の外、ひとわたりの會話・等を蘭語にて記して、片假名を添へ、讀み聲と意味とを記し・たり。此の書ひとたび世に出でてより、世の人々、洋文も、學ばば學ばるべきもの・なる事を知り・て、俄かに玄澤の門に入りて學ぶ者多くなりて、是れより、蘭學は世に廣まりぬ。

玄澤の翻譯したるものは、醫藥の書を初とし、砲術・博物・曆法・等の書二百餘部ありて、大いに蘭學を世に鼓吹せり。

玄澤、又、今日行はるゝ太陽曆の一月一日を、寛政六年に、始めて、新元會と稱して、祝せり。實に、今より百十餘年前の事にして、後、毎年擧行したり。文化八年、幕府の天文臺に

壓制
禁制
抑制
抑壓

蕃書和解御用掛といふを置くに及びて、第一に、其の職に擧げられたる・は、玄澤にして、是れ、蘭學を官府の公事業としたる初なり。

蘭學の先輩が壓制の禁を犯して洋文を讀み始めしは、罪に陷らんとも、日本を開かんには、西洋の學術ならねばならず、と云ふ精神にて、生命をかけて此の道を開きしなり。

今の世にては、洋學は立身の資にして、古人に比ぶれば、學ぶに自在にして、容易なれ・ば、古人の苦學と精神とを思ひて、古人に幾倍したる成功をせずして可ならんや。

○演習

(一) 漢字にて臓腑の名を記せ。

(二) 左の文字を用ひて熟字を作れ。

塵　償　篤　資　澤

(三) 本文の起筆と結局とを對照して、自得せる所あらば、それを語れ。

(四) 蘭學開祖の事業を簡單なる表に作りて示せ。

二九　自警七則

佐久間象山

行身規矩則不可不嚴。此治己之方也。治己卽所以治人。待人規矩則不可過嚴。此安人之道也。安人卽所以自安。

身ヲ行フ規矩ハ嚴ナラザルベカラズ。此レ己レヲ治ムル方ナリ。己レヲ治ムルハ、卽チ、人ヲ治ムル所以ナリ。人ヲ待ツ規矩ハ嚴ニ過グベカラズ。此レ人ヲ安ンズル道ナリ。人ヲ安ンズルハ、卽チ、自ラ安ンズル所以ナリ。

君子有五樂。而富貴不與焉。一門知禮儀、骨肉無釁隙、一樂也。取予不苟、廉潔自養、內不愧於妻孥、外不怍於衆民、二樂也。講明聖學、心識大道、隨時安義、處險如夷、三樂也。生乎西人啓理窟之後而知古聖賢所未嘗識之理、四樂也。東洋道德、西洋藝術精粗不遺、表裏兼該、因以澤民物報國恩、五樂也。

日晷一移、千載無再來之今。形神既離、萬古無再生之我。學藝事業豈可悠悠。敏一字是爲學之法、而爲治之要、亦莫若焉。天下可學可爲之務、如

君子ニ五樂アリ。而シテ、富貴ハ與カラズ。一門禮義ヲ知リ、骨肉釁隙ナキ・ハ、一ノ樂シミナリ。取予苟ニセズ、廉潔自ラ養ヒ、內、妻孥ニ愧ヂズ、外、衆民ニ怍ヂザル・ハ、二ノ樂シミナリ。聖學ヲ講明シ、心ニ大道ヲ識リ、時ニ隨ヒテ義ニ安ンジ、險ニ處ルコト夷ノ如キ・ハ、三ノ樂シミナリ。西人ノ理窟ヲ啓ケル後ニ生マレテ、古聖賢ノ未ダ嘗テ識ラザリシ理ヲ知ル・ハ、四ノ樂シミナリ。東洋ノ道德・西洋ノ藝術、精疎遺サズ、表裏兼該シ、因リテ、以ッテ、民物ヲ澤(ウルホ)シ、國恩ニ報ユル・ハ、五ノ樂シミナリ。

日晷一タビ移レバ、千歲、再來ノ今ナシ。形神既ニ離ルレバ、萬古、再生ノ我レナシ。學藝・事業、豈ニ悠々タルベケンヤ。

敏ノ一字、是レ學ヲナス法、而シテ治ヲナス要モ亦コレニ若クハナシ。天下學ブベク、爲スベキ・務、此

此其廣、如レ彼其大。故學與レ治、皆不レ可二以不レ敏。彼終二身于學一、而空疎無レ用終二身于官一、而因仍無レ功者、坐二其勤力不レ敏十常八九。

人譽レ己、於レ己何加。若因レ譽而自怠、則反損。人毀レ己、於レ己何損。若因レ毀而自強、則反益。

クノ如ク其レ廣ク、彼レガ如ク其レ大イナリ。故ニ、學ト治ト、皆、以ツテ、敏ナラザルベカラズ。彼ノ身ヲ學ニ終ヘテ空疎用ナク、身ヲ官ニ終ヘテ因仍功ナキ者ハ、其ノ勤力ノ敏ナラザルニ坐スルモノ十ニ常ニ八九。

人ノ己レヲ譽ムル、己レニ於イテ何ヲカ加ヘン。若シ譽ムルニ因ツテ自ラ怠ラバ、則チ、反ツテ損セン。人ノ己レヲ毀ル、己レニ於イテ、何ヲカ損セン。若シ毀ニ因リテ自ラ強メバ、則チ、反ツテ益セン。

（省譽錄）

○演習

(一)「人の己れを譽むる」云々の一段を口語文に改めよ。

(二)「日晷一移」云々の意を試に新體詩に譯せよ。

(三) 本文の中にて、深く心に感ぜし一節を諳寫せよ。

三〇　妹にさとす ※

吉田松陰

拙者自分小生迂生

この間は御文下され觀音樣の御洗米三日の精進にていただき候やうとの御事御深切の御志感じ入り中し候。精進潔齋などは隨分心の固まり候ものにて宜しき事と存じ候につき拙者も二月二十五日より三月晦日まで少

々志の候へば酒肴ども一向たべ申さず候。その間一度霊神様御祭のもの頂戴致し候ばかりに御座候。ましてあたりまへの精進の外にまた精進と申し候うては連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につきそれをそれと相答へ候事面倒に存じ候故八日よりさいはひ精進日なればその日一日にいただき申し候。

信仰　信心

抑、観音信仰せよとの事は定めて禍をよけ候ためなるべくこれには大いに論のある事に候へば委細申し進ずべく候。法華經第二十五の卷普門品と申すに観音力と申す事高大に述べてこれあり大意は観音を念じ候へば縄目にかゝり候へば忽ちぶつ〳〵と縄が切れ人屋に捕られ候へば忽ち錠鍵がはづれ首の座に直り候へば忽ち刀がちんぢに折るゝなど申してこれあり候。これは拙者江戸の人屋にてこの經は幾度も繰り返し讀みて見候へども始終この趣に候。それ故凡人はこれより有り難き事はなしとて信仰するも無理はなく候。

人屋　牢屋　獄屋　牢獄

ちんぢは方言にて微塵などの意。

さりながら佛の教は奇妙なる仕懸にて大乘小乘と二つに分ちて小乘は下根の人への教大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にて申し候へば観音は右の經文の通りのものと心得ひたもの信仰せしむることに御

下根　鈍根　愚鈍　下劣

ひたもの　ひたすら　ひたぶる

頓著執着

なのりやや

方便方法便宜

座候。これは大いに信を起こさする爲なり。信を起こすとは一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なき事にて一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば何事に臨み候うてもちっとも頓著なく繩目も人屋も首の座も平氣になられ候ゆゑ世の中に如何に難題苦患の來たるともそれに退轉して不忠不孝無禮無道等仕る氣遣ひはなし。されど初めより凡夫に一心不亂の不退轉のと申し聞かせても少しも耳に入らぬもの故に假に觀音樣を拵へて人の信を起こさせ候致に御座候。これを方便とも申し候。

さてまた大乘と申す方にては出世法と申す事が肝要に

御座候。出世と申し候うても立身出世など申す事には御座なく候。その初は釋迦が天竺王の若殿に候處若き時より感の强き人にて老人を見ては吾が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ死人を見ては吾が身も往くさきは死なんかと悲しみ蟲けらの死にたる草木のかれたるまでに悲しみを發し生老病死がこの世の習なれば是非にこの世を出でねばすまずと志を立てて年二十五の時位を棄てて山に入り右の生老病死を免るゝ修行をせられ候。さ候うて三十出山とてわづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り生まれもせねば老いもせず病みも死にもせぬ事を悟って出で來てそれより世の人を

濟世
救世

教化せられたるなり。これが卽ち出世法なり。故に出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは卽ちこの世の人を濟度する事に御座候。

さてその死なずと申すは近く申さば釋迦の孔子のと申す御方々は今日までも人が尊みもすればありがたがりもし恐れもし候がこれは卽ちこれらの御方々が今日までも生きて居らるゝには候はずや。死なぬ人なれば繩目も人屋も首の座も前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は双ものに身を失はれ候へども今以つて生きて居らるゝなり卽ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

效驗
靈驗
效能

さてまた禍福如繩といふ事を御さとりなさるが宜しく候。禍が福の種福が禍の種に候人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など人屋にて死ぬる事に候へば禍のやうなるものに候へども一方には學問も出來己れの爲人の爲後の世へも殘りかつがつ死なぬ人々の仲間入りも出來候へば福この上もなきことに候。人屋を出で候へばまた如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論その禍の中にはまた福も交り候へども所詮一生の間難儀だにせば先には福あるべし。何の效驗もなき事に觀音に賴みて福を求むるやうの事は必ず〳〵無益と存じ候。尤も右の通りに申し候へば身勝手なる申し分不孝なる

申し分と御存じあるべきか。こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申す事を大いに嫌ふなり。御互に七人兄弟のうち拙者は罪人芳は天折敏は啞子否様（ザマ）のわろきやうなるものなれどあと四人はいづれも可なりに世を渡られ特に兄様そもじ小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を御覽なさるべし。これ程にも參らぬ家が多く候。近くはそもじの家にても高須などにても兄弟の内にはわろき人も隨分あるなり。然れば父母兄弟のかはりに拙者芳敏の三人が禍を受くるにこそと御思ひ候はば父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。

否様は方言にて、運の意。

そもじ
わもじ
かもじ
めもじ
しゃもじ。
すもじ

端午
人日
上巳
七夕
重陽

かつ杉は隨分多福の家なれば拙者の身の上よりは却つて杉が氣遣ひなるものに候。拙者身の上は前に申す通りつめが牢死牢死しても死なぬ仲間なれば後世の福は隨分あれど杉は今にては御父子とも御役にて何の不足もなき中なれば子供らがいつもこの様なる者と思ひて昔山宅にて父上母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なればこの先五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて御覽なさるべし。氣遣ひなるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを人はめでたしめでたしと嬉しき顔をすれど拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬゆゑ、始終稽古場にかが

みて人の知らぬ處にてはひとり落涙したる程の事に候ひき。もしや萬一小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば杉の家も危し危し。父上母様の御苦勞を知つて居るもの兄弟にてもそもじまでに候。小田村にてさへ山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして久坂などは猶以つての事。されば拙者の氣遣ひに觀音様を念ずるよりは兄弟甥姪の間へ「樂は苦の種福は禍の本」と申す事をとくと申し聞かする方が肝要に候。

なほまた一つ拙者不孝ながら孝に當たることあり。兄弟のうちに一人にても否様のわろき人あればあとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり兄弟も睦ま

勘辨
勘考
熟慮

しくなるものなり。これより拙者は兄弟のかはりにこの世の禍を受け合ふゆゑ兄弟中は拙者のかはりに父母に孝行してくださるべし。さすれば、つづまる所兄弟中皆よくなりてはては父母様の御仕合はせまた子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めでたき事はなきには候はずや。よく〳〵御勘辨候うて小田村久坂なんどへもこの文御見せ佛法信仰はよき事なれど佛法に迷はぬやうに心學本なりとをり〳〵御覽なさるべく候。心學本に

のどけさよねがひなき身の神まうで。

神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。（俗簡襍輯）

○演習

(一)「不生不滅不垢不淨不增不減」、此の文を假名交り文に改めよ。

(二)「塞翁が馬」の話を簡短なる文に綴れ。

(三)「樂は苦の種福は禍の本」といふ語を敷衍せよ。

(四)左の語の誤を正せ。

あたりまえ　さひわい　大ひに　ありがたひこと

きづかい　老ひもせず　心の迷い　矢はれ候得ども

(五)本文につきての所感を述べよ。

再訂

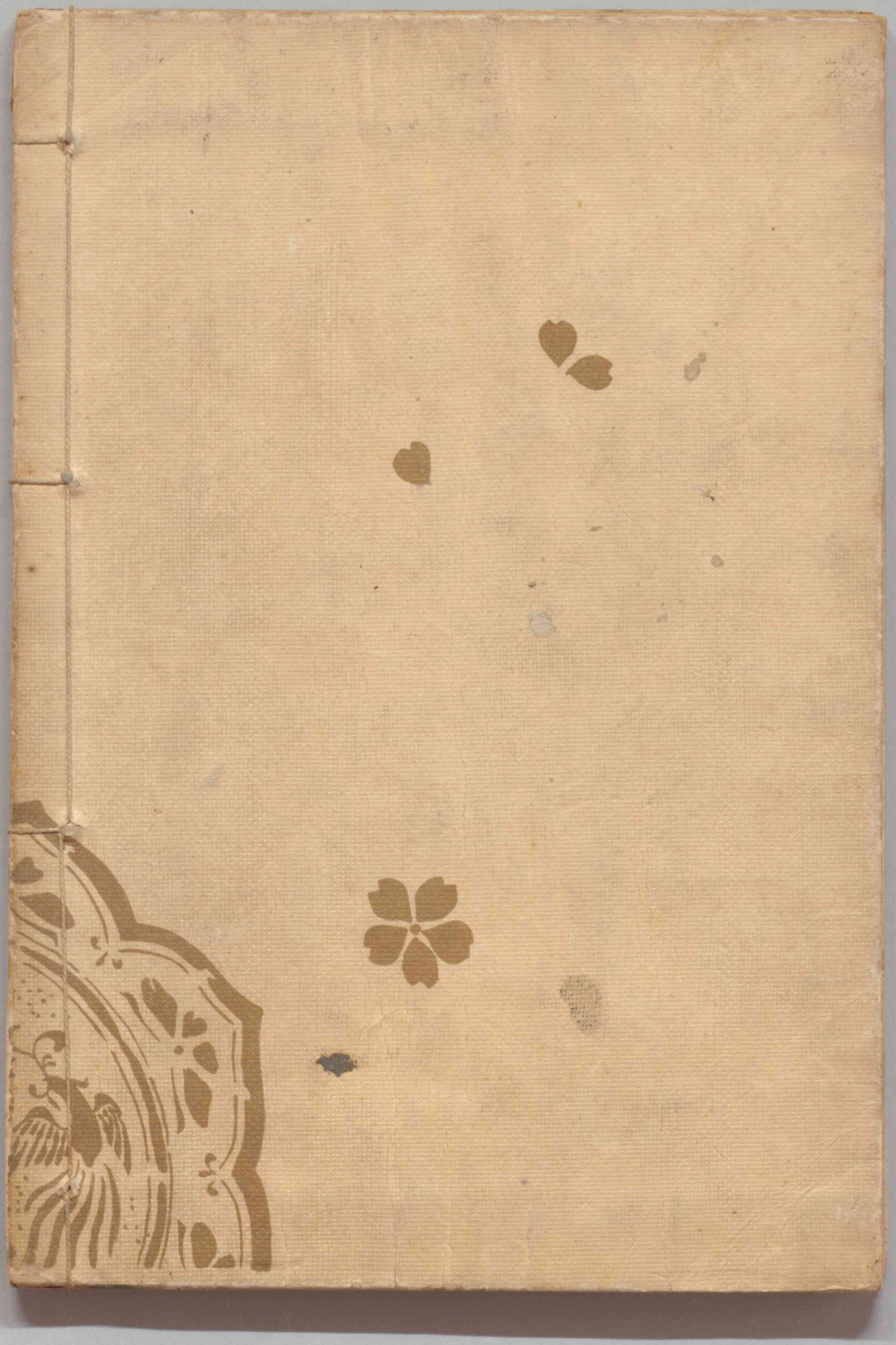
女子國語讀本卷七 終

明治四十年十二月五日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用教科書

再訂女子國語讀本　全十册
定價　各册金貳拾五錢

發賣所　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社
賣捌所　各府縣特約販賣所

明治四十二年二月十八日第十版

著作者　吉田彌平　小島政吉　篠田利英　岡田正美
發行兼印刷者　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社
代表者　東京市下谷區龍泉寺町四百十番地　原亮三郎
印刷所　東洋印刷株式會社　東京市芝區愛宕町三丁目二番地

許可
複製